
霸王の義兄は転生者

春雷海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霸王の義兄は転生者

【Zコード】

Z93290

【作者名】

春雷海

【あらすじ】

彼は霸王の義兄で武道の天才、そして転生者（だからと言つてオタクなんかじやない）である。

『リリカルなのは』の世界で彼はどのような物語を紡ぐのだろうか……。

プロローグ

長さ3mは軽くある扉の前に立っていた。

「……なんだ」「いや？」

辺りを見渡してもなにもない　ただただ白い空間が広がっているだけだ。

『病魔に犯されながらも懸命に生きた少年、さかきばり 榊原 とうま 冬馬』

と後ろから声が掛けられた俺は振り向いて見ると、そこには一対の翼を羽ばたかせ金髪の髪を靡かす一人の女性がいた。

「…………誰？」

『君は何故家族を愛していた?』

しかし、彼女は俺の問いかに答えることもなく、言葉を紡ぐ。

『健康な体を持つ姉や双子を、そしてこんな身体にした自分を生んだ母親を、一度は自分を見捨てかけた父親を、憎んだことはなかったのか?』

「…………あるわ」

彼女の言葉のすべてを否定することなんてできなかつた。

姉と双子はなんで健康の身体を持つていいんだと、逆恨みのようだけど自分をこんな身体にした母親を、そして俺を見捨てるような行為をした父親を、本氣で憎んでいた。

「一度、俺は家族を憎んでいたことを言つた……情けないことに泣きながらな」

『…………』

女性は何も答えず、俺の言葉を聞いていた。

「そしたらさ、あの人たちはそれでも俺のことを愛しているって言つてくれたんだ。その言葉を信じた……大事な家族だから」

あの気丈が強い姉が泣きながら、双子が涙と鼻水をぐりやぐりやしながら、両親が涙を流すのをこらえながら、言つてくれた言葉を。

「昔の俺は憎んでいた……でも今は違う！　俺はあの人たちのことを憎んじやしない！」

『そりか……ならば大丈夫だな』

何が大丈夫なんだと聞こいつとする前に、女性は微笑みながら扉を指差す。

『その扉は汝の新たな人生を迎える扉……どのように生きるかは汝の自由。だがこれだけは言わせてもらおう……幸せになれよ』

そう言いながら女性の身体は粒子となつて消えていった
なんであんなことを聞いたのかが結局聞けなかつた。
な

幸せになれるよか……。

「ま、住む世界によつては幸せになれるかもな
そつ言いながら俺は扉を押し始めた おもつ！？ 俺は力を込
めて扉を押していく。

そして徐々に扉が開いていき、光が漏れ始めた……。

「も、もう少しつ……！」

自分の中にある筋肉を最大限に使い、扉を押していく ついに扉
が開いた。

ま、まぶしつ！

目が潰れるんじゃないかと思つてらいの大量の光が俺を浴びていく。

光を浴びれば浴びるほど、俺は眠気を感じてきた…………そして俺
の視界は「ブラックアウト」した。

プロローグ（後書き）

プロローグ終了です。

主人公がいつたいどのような物語を紡ぐのかを楽しみにしてください！一応主人公はチートにしようかなって考えています
だからと言つて超チートにはしません。

プロローグ2（前書き）

今回も短いです、亀更新になります。

プロローグ2

暗くなるかならないかの境目の時間帯、いつもだつたらにぎやかなこの公園も今は静かさを漂つていた。

「ふう、今日も疲れたわねー」

そんな公園に軽く伸びをしながらゴムパンにトレーナーのラフな格好のリュックを背負い、一際目立つ碧銀の髪をポニー・テールに纏めた女性が歩いていた。

「家に帰つたら、あの人の手料理が待つてゐるんだし、早く帰りましょ」

女性は家で待つてゐるだらう愛する人とその手料理を思い、急いで帰るために駆け足になりかけたが、

「あら?」

ベンチにある白い布に包まれた何かに目を惹きつけられ、ゆっくりとそれに近づいていた。

気にするなど心の中で思つてもどうしても見たくなつてしまつ。女性は胸の中から湧き出る好奇心に負けて剥ぎ取つた。

「え……?」

そこには一人の赤ん坊が穏やかな眠りを着いていた。

女性は死んでんじゃないかと思い、慌てて赤ん坊の類をやせじへ叩く。

「お、起きて！ 起きなさい！ 起きなさいってばー！」

「…………あ？」

赤ん坊はまづくつと瞼を開いた。

それに女性は安堵の息を吐く。

「ふう、よかつたー。ひどい親がいるものねえ、あなたを捨てる
だなんて……」

「うう……」

女性の放った言葉に理解できたのかどうかは知らないが赤ん坊は頷きかけるが、再び眠りに落ちた。

しかし、女性はそれに気づくことなく、赤ん坊を抱き締める。

「もう大丈夫よ、あなたは私たちが引き取つてあげるからね」

女性がそう言って、赤ん坊を自分の家へと連れていった。

† † † †

再び目を覚ましてみると、見知らぬ男女が俺を見つめていた。
…………どちら様？

「ああ、よかつた。ちゃんと目を覚ましてくれた！」

「よかつたね、マリカ」

女性は嬉しそうに微笑み、男性はその女性の頭を優しく撫でる。

……ああ、思い出した。

確かに俺は両親に捨てられたんだ。

瞳の色 紅い瞳が気持ち悪いと言われて、俺は捨てられたんだ。

これで俺の新たな人生は終了だと思つて寝ていたら……あの女性が助けてくれたんだっけな。

「…………でビリ?」

「いいね、君もそれでいいかい？」

「ふあ？」

え？ 何が？

俺の困惑を無視 当たり前だが して女性…………マリカさんは人はこじりと笑い。

「それじゃ、これからようしきね、リンク」

え？ リンクって…………まさか俺！？

こうして俺はリンクとこう新しい名とストラトスとこうな字を貰い、リンク・ストラトスとこう名で新たな人生を歩むことになりました。

プロローグ2（後書き）

長く書くつて結構難しい、でも頑張りますので、どうかよろしくお願いいたします。

第1話（前書き）

PV50000到達しました、ありがとうございます！

更新は亀並みに遅いですがよろしくお願いいいたします！

漆黒の空に降り注いでくる雨のなか、自分にとつて知らないはずの場所に立っている、少年がいた。

少年は周りを見渡す……。じーがこつたいじーなのかを調べるために。

周りを見渡しても、少年にとつても見覚えのない場所……。

少年は歩き出すと足を動かさうとしたとき 背後からなにかを感じた。

少年は慌てて振り向くと、そこには

「……また、あの夢か」

少年は見慣れた天井が見えると同時にため息混じりにその言葉を放つた。

ベットから降りて、少年は軽く伸びをする。

「つたく、何なんだあの夢は、気になるところでブツンと消えるなんて」

ぶつぶつ文句を言いながら少年は着慣れたパジャマを脱ぎ捨て、これまで着慣れているジャージに着替えて、自分の部屋に出来る。

廊下を歩いていると、いい匂いが漂つ。ビングに少年は顔を出す。そこには鼻歌を歌いながら料理をしている痩せ細い身体の男の姿があつた。

「父ちゃん、おはよう」

少年、リンク・ストラトスは自分の父親に挨拶をすると、父は料理する手を止めてリンクのほうへ振り向いた。

「ああ、おはよう、リンク」

優しい微笑みを彼に向けて、そう言った。

「今日もアルスさんの特訓かい？」

「うん、だから心配しないで」

そう言ってリンクは玄関に歩きだしていった。

残された父 ルーク・ストラトスはため息をつきながら、

「……やつて怪我したじやないか、リンク。 心配だ」

† ? † ? † ? †

「…………」前世の名前が冬馬だつたリンクです。

俺がここに転生、そして母に拾われてから9年が経ちました……時の流れつて早いね。

俺が今いる世界は地球ではなくミッドチャルダといわれる世界にいます。

…………この世界つてすゞくなー？ だつて地球の科学技術を軽く上回つてゐんだぞ？ 地球の人らが見たら、なんじやこつやつと思つだらうな。

まあそんな世界にかれこれ9年もいれば、流石に慣れてきました。

つと、急がないと遅刻しちやうな。

え？ なにに？ 特訓か、特訓……つと着いた着いた。

「遅れて申し訳ございませんでした、アルスさん」

「ん、気にするな。 そんなに遅れてなんていないぞ」

伸びきつたダークブラウンの髪を乱雑に纏めている20代後半の男性、武道の師匠であるアルスさんがベンチからゆっくりと腰を上げる。 そしてその隣には、

「…………なんで母さんがここにいるの？」

俺の母であるマリカ・ストラトスが一瞬一瞬ながら座つていた。

「ん？ わたしの大切な息子を痛めつけないよう見張つているのよ」

「……いや、痛めつけてるわけではない。ただ特訓を」

「もう言つて2週間前に大怪我させたのは誰だつたかしらあ？」

あ、アルスさんの顔が真つ青になつた。

母さんは微笑みながら指を「ゴッキンゴッキン」鳴らし始めた……怖つ！

一週間前、俺とアルスさんは普通に訓練していたのだが、アルスさんが使つていた秘技を真似して放つたのだ。

しかし、その切つ先がアルスさんに当たる前に、俺は意識を失つた。

肩への激痛と共に目が覚めたら、そこは自分の部屋で、心配そうに見てくれた父さんと母さん、そしてぼろぼろにされたアルスさんが土下座で謝つている姿があつた。

「今度あんな」としたら……命だけじゃすまらないわよ？」

「は、はい！」

アルスさんは怯えながら母さんに敬礼する……。

……助けてあげよう、なんかかわいそうになつてきた。

「アルスさん、早く特訓しましょ！」

「あ、ああ、そうだな」

アルスさんは心から助かつたと言わんばかり顔を輝かせ、傍らに置いてあつた刀身の軟らかい剣 と言つても中には細い鉄の棒が入つてると聞いた を取り出した。

以前は木刀だつたのだが、2週間前のことがあつたため、このよくな剣になつた。

それを一本は俺に渡し、もう一本はアルスさんが持ち構えだした。俺もそれを構え、そして、

「はじめっ！」

母さんの掛け声と同時に俺とアルスさんの剣がぶつかり合つた。

一合、二合、三合、四合、五合と刃をぶつかり合わせた。

次に横薙ぎ、払い上げ、袈裟懸け、基本である斬撃を放つが、アルスさんは片手で受け止める。

「なら、虎牙破斬！」

アルスさん直伝の技を放つと、アルスさんは両手で柄を持ち、すべ

てを受け止めた。

「ふむ、惜しい」

「ま、まだまだあ！」

叫ぶと同時に跳躍し、自然落下を利用した威力の高い斬撃を放つ分かる人は分かる龍槌閃だ。

これはアルスさんから学んではない……前世に読んだ『るり剣』で、使ってみたいと思ったので、独学で学んだ。

しかし、これも、

「つむ、やつぱり惜しい」

いとも簡単に受け止められ、俺は地面に足を着くと同時に尻餅ついた。

「つ、つかれた…………つてうわあー」

いきなり母さんは俺の足を掴み、背負つた。

「それじゃあね、アルス」

「ああ、それじゃあな。リンク、学校がんばれよ」

アルスさんは一本の剣を手に持ち、俺たつと逆の方向に歩き出していくつた。

背負われた俺はばたばたと暴れたのだが、如何せんうまくこかない。足を持たれてしまい、またか母さんを殴るわけにもいかないから手も動かせない。

「か、母さん！ 大丈夫だよ、心配しないで！」

9歳の頃だったらうれしいだろうが、俺は前世の記憶があるから恥ずかしい。

「駄目よ これから学校でしょ？ 疲れて眠つちやうじやない、だから甘えなさい」

「いや、だかりー。」

口論 と言つても俺が一方的に言つて、母さんはのらりくらりと避けられてるけど をしながら母さんと俺は家へと帰つていった。

第1話（後書き）

……早く原作キャラを出せるとつに必死こいて書いていきますので、本当によろしくお願ひいたします！

第2話（前書き）

亀更新で申し訳ございません、まだ当分アイソハルト出て来ないかもしません

リンク side

「それでは今日の授業は終わりです、氣をつけておかえりなさい」

『はーいー』

教卓の前に立つている先生がそう言つと、生徒たちはさう言つて立ち上がり帰つていく。

「んうー、疲れたなー」

生徒たちに雜じつて俺は大きく伸びをしながら下足場へと向かうと、

「やあ、リンク」

そこには一人の人物が俺を待つかのように立つていて。 そのうちの一人は青髪の少年、もう一人はピンクの髪の少女だ。

「レノンとセラ。 待つてくれたの？」

「一緒に行く約束していただじやないか。 それに先に帰つたら、セラのやつが怒つちゃうからね」

「レ、レノン！」

レノンがにやにや笑いながらそう言つと、セラは頬を真っ赤に染めてレノンを咎めるように言い放つた。

…… じつじつ見ると兄弟みたいだよな、この二人つで。

彼はレノン・ナカジマ、彼女はセラ・ファロン。

この二人は俺の親友とも言えるべき存在だ。

クラス別でも俺たちは休み時間の間でも仲良く遊んでいるので、『仲良し三人組』と言われている。

「ほらほら、レノンもからかうのはやめな、セラがかわいそうだろ？」

「へへつ、よかつたね、王子様が助けに来てくれて」

「むう～～～～～～！」

「だからやめなつて……」

…… ちゃんと仲良しだよ？

* * * *

学校から出て数分後、俺たちはショッピング街にある手作りの装飾品店にいた。

このお店はかなりの人気店であり、女子学生や年配の女性、さらには彼女にプレゼントをするために男子たちも結構来るらしいのだ。

「見て見て、これなんかどうかな？」

セラが指差したのは飾られているイヤリング。

値段を見てみると…… 2000円か、高校生や中学生ぐらいだつたら買えたんだが、

「僕たちの小遣いを合わせても、それは買えないよ……」

「合わせても1300円だからな……」

残念ながら、あと700円足りないな。

セラは「そつか」と残念そうに言つて、再び店のものに視線を映し始めた。

なかなかいいものを見つからないな、あの人に似合つ装飾品は本當にあるのかな?

三人で探していると、

「あつ！ これがいいんじゃないかな？」

セラが指差した先には、藍色と青色が見事にコラボレーションされているロケットペンダントが飾られていた。

……うん、いいな。

値段もちょうどの1300円だし、なによりある人にとっているかもしれないな。

俺たちはそれを買つことに決定し、口ケットペンドандを手に取り、それをレジにいるお姉さんまで持つていき差し出す。

しかし、

「はい、1365円です」

……しまつた、消費税も込みだつてことを忘れていたな。

全員での1300円は持つてゐるのだが、あと65円は残念ながら俺は持つていらない。

困つた俺はダメもとで2人を見るが、

「…………」

「…………」

2人も縋るよつに俺を見る、だが俺も持つていないので、両手を上げた。

やれやれ、諦めるしかない様だな、俺はお姉さんにやめますと声をかけよつとしたら、

「ほい、これならいいかな？」

突如、聞きなれた声と同時に俺の手の中に65円が上から落ちてき
た。

それに俺は思わず顔を上にあげると、

「よハ、コンク、それにレノンもセラも、

「ヒトヒナ、お兄ちやんたちー、

オレンジの髪が皿立つお兄さん……ティーダ・ランスターと、その妹のティアナ・ランスターの姿があつた。

第2話（後書き）

今回も短すぎて「ゴメンなさい、あの人についてはまだ秘密ですが、次に出てくるかもしれません。

第3話（前書き）

皆様のおかげで、p v 1 8 8 4 5 ユニーコが4 5 7 7 になりました。 ありがとうございました！

「助かりました、ティーダさん」

「いや、気にすんな。あの時いたのは本当に偶然だったんだ」

ティーダさんの助けでロケットペンドントを貰えた俺たちは店を出て、ある人の家へと向かっていた。

ティアナはレノンと手をつないでうれしそうに歩き、レノンは恥ずかしいのか頬を紅く染めながら歩き、セリはレノンをからかいながら歩いている。

前へ進んでいくティアナとレノンにセリに對し、俺たちは後ろで見守るよつこ歩いている。

「コンクはあのなかに行かないのか？」

「あそこに行ってしまったから、俺まで巻き添えになつやこまやく

ティーダさんの言葉に苦笑しながら言った。

「やれやれ、レノンも可哀想だな

「いやいや、いつもセリをからかって、喧嘩しそうなところを俺が止めてやつてゐるんです。その罰としてこれでねこまやくもやわらかうこと

にやつと笑つと、ティーダも「なるほど」と呟いて、返すやつに

やつと笑つた。

「だつたら見守るうか」

「ええ」

俺たちは悪友のように笑いあつた。

時折、レノンの助けを求める視線を感じたのだが、俺らはそれを気がつかないふりをして話をしていた。

俺たちが歩く」と五分が経ち、家を行く際に通り過ぎたはずだった公園。

しかし、俺は公園内で黒いワンピースを着た金髪の女の子が木を見上げていた。

みんなに待つていてと声を掛けて、俺はその女の子に近づいていった。

* * * * *

びつじょつ……なのはがくれたりボンがあんなどこひん。

登ろつにも、私は木登りなんてしたこともないし、バルディッシュもない。

でも、なのはがくれたりボンを放つておいて、帰れないよ……つ。

…………よしぃー！　登るの、大丈夫、何とかなるさすー！

私は木に登るのと一歩近づくと、

「どうしたの？」

後ろから声を掛けられ、思わず振り向いてみると、やうやく私と同じルビーのような紅い瞳で漆黒の髪の男の子がいた。

* * * * *

リンク side

「どうしたの？」

そう声を掛けると、女の子は肩をビクッと震わせて、俺のほうへ振り向いた。

おお、この子は俺と同じ紅い瞳なのか……。

「え？　あ、あ、あみは？」

「どうかしたの？　木なんか見ちゃって」

女の子の問いに俺は軽く無視して、訪ねた。

その子は戸惑いながらも木　3メートルぐらこある間に

上げた、俺も釣られるように見上げてみると、

を見

「ああ、リボンが引っかかるちゃたんだ、ちょっと待つて」

俺は木の枝を掴み、スルスルと登つていぐ。

途中、細い枝が俺の頬を擦つたが、気にはせずにリボンが引っかかる
ている枝に近づき、腕を伸ばせば届く距離だ。

俺は腕を伸ばして、掴もつとしたとき、

突然の強い風が吹いてきた。

その風によつて、リボンは飛んでいつてしまつた。

「ちつー！」

運がいいことに、俺が足についているのは太い枝だつたため、跳躍
することができた。

ひらひらと飛ばされそうになつてゐるリボンを片手で掴んだのだが、
足元は空中にあり地面などないため、重力によつて俺は落ちていく。
女の子が悲鳴を上げ、ティーダさんたちも慌ててこちらにやってくる。

「やれやれ……」

「うーん」とついて、俺は横になつている身体の体制を整え、縦回転をしながら、地面に降り立つた。

そんな光景にみんなも呆然として俺を見ている。

「ほー、これだろ」

「あ……うん、ありがとう」

差し出されたリボンと俺の顔を互いに見やりながら言った。

「大切なもんなら、吹き飛ばされないよ」とちやんと大事に持つていなよ」

俺はそう言って女の子の頭をやさしく撫で、不器用ながらもリボンをつけてあげた。

「それじゃ、ティーダさん、行…………あだつ！」

「あましょうか」とつづくとほなく俺はティーダさんに拳銃を食らう、わざとには俺のこめかみに両手を添えてグリグリさせた。

「！」の馬鹿！ 心配をせぬごじゃねえー！」

「いだだ、いだいいだい！ たすけてえー！」

「私たちを心配せめた罰だよ、リンク」

「僕もセリと同意」

セリヒとレーノンは助けの仮はないらしい、ティアナに助けを求めるが、
ブイツと顔を逸らした……ああ頗もか。

「ふつ……くすくす」

女の子も面白がりに笑い始めた……「ああ、恥ずかしい恥ずかしす
あひー。

* * * *

男子がグリグリから開放されたのは、三分経つてからだった。

「こ、こ、ひどい事にあつたよお」

男子は涙目で「ぬかみを押さえながら言つけど、オレンジ髪のお
兄さんは「コレくらいで済んだんだから、ありがたく思え」と呆れ
ながら言つた。

……まさか、あれ以上のことをしようとしたのかな?

「それじゃ、やるやうに行つたか」

青い髪の男子は苦笑しながら言つて、その場にいたみんなが頷いて、歩き出しついた。

「それじゃあ、今度は飛ばされなこよつて仮をついたね」

男子は私の頭を撫でながら言つて、歩き出しついたとき、

「私は……フュイト・テスターッサ。 また、会えるかな?」

男の子は振り向いて、いたずらっ子のよつな笑顔を見せて言った。

「俺の名前はリンクだ、運がよければ会えるさ。 またな」

そう言って男の子、リンクは遠く行ってしまった友達のところまで走つて去つていった。

「うん……またね、リンク」

リンクの名前を言つたら、顔が熱くなつていいく…………なんでかな?
?

第3話（後書き）

今回も、例のあの人はでない……いつたいいつになつたら出せるんだろう。

第4話（前書き）

……今回も短いです、すんません。

更新が遅いけれども、がんばってこなめます！ これからもよひじく
お願いします！

リンクSide

あの人のお家にたどり着いた俺たち、そこには母さんたちが既に着いていて、みんなで飾り付けをしていた。

「ねえ、リンク。これでいいかな？」

セラはぐるりと回転し、可愛らしいピンクのドレスの裾を翻しながら、水色の折り紙で花の形にしている俺に聞いてきた。

「うさ、似合ってる。セラはやっぱピンクの服が似合ってるな
えへへ、そうかな？」

はにかみながらセラは頬を両手で押さえるその姿は大人たちでさえ魅惑してしまう。ううなほど可愛らしい。

「うふ、ほんと……うわー！」

「リンク兄さん」

ゆづくつと立ち上がりながらしたら、背中に軽い衝撃がきた。

甘え声で自分に抱きつってきたのは、

「ギンガじゃないか、どうしたの？」

レノンの義妹である、ギンガ・ナカジマだった。

「えへへ、どうですか～？」

ギンガも青いドレスの裾を軽くつかみながら、そう聞いてきた。

どうもなにも……、

「似合つてゐるじゃないか」

「わーい」

ギンガがうれしそうにそして喜びながら両手を上げた。

しかしそれと同時に、セラの顔が膨れつ面に変わり、俺を睨んできた　しかし俺のほうが背が高いので、上目遣いで睨んでいる、だがあまり怖くない。

「？　どうした？」

「なんでもない。」

そう言つてセラはプリプリと怒つて、様々な色がある輪を飾つて、いる母さんと父さんのところに向かった。

「……？」

何を怒つてゐるんだ？　何か悪いことを言つたかな、俺？

「あらあら、怒らせてしまったわね

後ろから面白そうに掛けてくる声に振り向いてみると、そこには紫の髪が特徴な女性、メガーヌさんの姿があった。

しかし、その腕にはあの子がいなかった。

「あれ？ ルーテシアはどうかしたんですか？」

「ああ、あの子はアルスさんが面倒見てくれてるわ

メガーヌさんが指差す方向を見てみると、アルスさんが赤ん坊メガーヌさんとアルスさんの愛の結晶である ルーテシアを抱いている。

「……なんかほのぼのとしちゃなくって」

「そうね、ってそうじやなべって」

メガーヌさんは俺にぺちっと軽く頭をたたくと、俺を軽く睨む。

「駄目よ、セラを傷つけちゃ

「？ 傷つけていませんよ？ ただ、俺は、ギンガのドレスがかわいいって言つただけですよ？」

「ん~、それがね、セラを傷つけたってことが分からない？」

「？？」

メガーヌさんの言葉に俺は首をかしげる……こつたいたいどうこつ意味だ？ ギンガにかわいいって言つただけでセラが傷つくなのか？

「うへん、 なんて言つたらここのかしら？」

「リンクにそんない」と言つても無駄ですよ

「うへいながら呆れ顔でやつてきたのはセラの姉であるエクレールさん。

セラと違うのは田じりがどこか厳しく見えるといふかな？

「こつは鈍感ですから、 恋愛に関する特に」

「あひあひ、 そつなの？ これまあの子達、 落ちるわね」

「ええ、 まつたくです」

エクレールさんとメガーヌさんは俺の顔を見ると、 ため息と同時に苦笑いをしてしまつた。

？ なんなんだ、 本當に？

俺が一人に何を言つてこるのかを尋ねよつと顔を掛けよつとしたら、

「おーい、 リンクー サボつていないで、 手伝つてよー」

「あーーー、 めんめんー」

レノンが情けない声で俺を呼んだため、 声を掛けることを断念し、

レノンの下へと走つていった。

* * * * *

マリカ side

「ほり、じはまつやるんだよ」

「むう、結構難しいね」

リンクはレノン君に色とりどりある折り紙を使って花の作り方を教えていた。

ただ、レノン君はゲンヤさんと同じで不器用だから、作るのに四苦八苦していた。

まるで、兄弟のように接している一人の姿を見て、私は思わず笑ってしまった。

それと同時にリンクが強く優しい子になつてくれたのがうれしくも感じた、たまに大人っぽい雰囲気を出す不思議な子だけども、それでも私たちの大切で愛しい子。

「？ 母さん、どうしたの？」

突然笑い出した私に疑問を思つたのか、首を傾げて聞いてくるリンクに、私はなんでもないわと言つて、その場を離れ、ルークの元へと歩んでいった。

「手伝うわ、ルーク」

「ああ、ありがとう」

ルークが笑顔で礼を言つと、色とりどりの輪を取り出して、私に手渡してくれたそれを壁に飾り始めた。

第5話（前書き）

……今回も短い。

でも後悔はー、後悔はー…………してこます、マジですこまはん
でした。

ミシードナルダにある住宅街を、白髪の男性はどこか恥ずかしげに、女性は恥ずかしさを見せずに笑顔を浮かべながら、腕を組んで仲良く歩いていた。

「今日は楽しかったわ、ありがとう、あなた」

「礼を言われる筋合いはねえぞ、クイント。 今日はお前の誕生日だろ？ でもまあ……たまにはドーツーってのもいいな」

男性、ゲンヤ・ナカジマは照れくさそうに頬を搔きながら、自分の妻であるクイント・ナカジマにそう伝えると、クイントは思わずゲンヤの身体に抱きついてきた。

「お、おおいー、おー、住宅街だぞー？」

「いいじゃない、気にしないで」

「気にするわー、早く、離れろー」

ゲンヤは抱きつかれたことにより頬がかなり紅潮した。

クイントを引き離そうと彼女の肩をつかんで放せようとしたが、クイントの力がかなり強いため引き離すことができなかつた。

しかし、ゲンヤは諦めずに何度も彼女を引き離そうとしたが、すべてが無駄に終わつた。

ついに諦めたのか、ゲンヤも彼女を抱きしめ、顔を彼女の髪に埋めた。

「……何をやつておるんだ、お前たちは」

呆れた声で一人に声を掛けた ゲンヤにとつては天の助け、クイントにとつてはお邪魔虫となつた のはレジアス・ゲイズであった。

その隣には親友のゼスト・グライガンツとその娘であるオーリス・ゲイズの姿もあつた。

ゼストもレジアスと同じ呆れた顔で見ており、オーリスは顔を真つ赤にさせていた。

「お前たちは、別に抱きつくなとはいわんが……」

「さすがに場所を考えろ、場所を」

レジアスとゼストがやれやれとため息を吐きながらそつそつと、オリスもそれに同意なのか「クククク」と頷いた。

ゲンヤはりんごのように顔を真つ赤にさせ、クイントは不貞腐れたように「はーい」と言つた。

「さひと、さつさと行くぞ、ゲンヤ。あの子たちが待つてゐるぞ」

「…………はい、ほら行くぞ、クイント」

不貞腐れているクイントの手を引つ張つて、ゲンヤは自分の家の前にクイントを立たせた。

「？ どうしたの？」

クイントの問いには答えずに、ゲンヤはただ扉を開けるように促していた。

頭にハテナを浮かべながら、クイントが扉を開けると同時に、

パンパンッと小気味のいい音が鳴つた。

「ふえ……？」

『誕生日おめでとう、クイント（やん）……』

目の前にいるのは、クラッカーを持った親友たちと自分の愛しい子たちとその友達が笑顔で自分を迎えていた。

クイントは思ひがけないサプライズで呆然としました。

「えへへへ、大成功！」

マリカがいたずらっ子のように笑いながら、ルークとアルスとメガーヌとエクレールにハイタッチをする。

「！」これつていつたい……

クイントがそう聞くと、彼女の子供らが近づいてきた。

「えへへ、母さんを喜ばせようとして、僕たち全員が考えたことだよ」

「大好きなお母さんを喜ばせたかったの」

「いつも、私たちのこと好きでいてくれる母さんのために」

レノンとスバルとギンガが笑顔でクイントにそう告げると、クイントは三人を思いっきり抱きしめた。

「つ……あ、あり、ぐずつ、ありが、ぐずつ、ありがとぉうう……」

涙を流しているけれども表情はうれしそうに笑っているクイントを見て、その場にいた全員　先ほどやったマリカたちも　ハイタツチをした。

第6話（前書き）

もうすぐ、年がけますね。

新年もよろしくお願いします。

リンク side

「ああああー クイントの誕生日会の始まり始まりー！」

母さんはクイントさんをテーブルの真ん中の席に座らせるとい、 そう叫びながら、自らも席に座った。

「それじゃあ、 まずクイントくとプレゼントよ。 最初はわたしたちからよ、 ルーク！」

「はいはー」

そう言つと、 父さんは、 椅子の下から青い袋を取り出し、 それを渡した。

「ありがとう、 マリカ、 ルーク」

「気にこいつてくれればいいんだけど……」

母さんは不安そうに頬を搔いた。

それに関しては大丈夫だと思つ、 母さんとクイントさんつてどこか似てゐるから……。

多分、俺の予想だと、 プレゼントはスニーカーかもしけない。

「はー、 私たちはこれよ」

メガーヌさんが取り出したのは、クイントさんが前から欲しいと言つていた、映画のDVDだつた。

「ああ！ それって限定物の…？」

「わうよ、アルスさんと一緒に探したのよ、結構苦労したわね」

「そうだな、もう何軒くらい回つたのかも、密たちの凄まじい勢いも、忘れてしまつたよ……」

アルスさんは遠い目をしながら、そう語つた。

隣りに座つていたティーダさんは、アルスさんに黙祷していた。そこまでつらかつたのか？

ティーダさんは「あれつて、豪華俳優がインタビューに答える場面や撮影現場にNG集も入つた、超限定物だからな。手に入れただけでもすげえよ」とのこと。

「アルスのぼやきは放つておいて、次はエクレールちゃんよ

「あつ、はい。私が選んだのは、ありきたりなものです、どうぞ」

なにげにひびこことを言つた、母さん。

エクレールさんは、慌てながらもどこか恥ずかしげに、包装された小さな箱を渡すと、クイントさんは微笑みながら、エクレールさんの頭を撫でた。

「ありがとう、エクレールちゃん、嬉しいわ」

「あっ、いえ、そんな」

普段、生真面目なエクレールさんが顔を真っ赤にしている姿など、あまり見られないのに、なんだか新鮮に見えてしまった。

隣にいる、セラは何処かニヤニヤしながら、エクレールさんを見ている。

「つ、次はスバルとギンガ、お前たちが渡してやれ」

エクレールさんはそつとクイントさんの手を離し、まだかまだかと疼いているスバルとギンガにそつと、パッと輝かんばかりの笑顔を見せて、クイントさんに近づいていった。

「えへへ、あたしはこれ!」

「お母さん、使ってね!」

スバルは青いエプロンを、ギンガは『簡単料理レシピ集』の本を、渡した。

クイントさんはちょっと顔を引きつらせながらも、一人にありがとうと言つて、受け取つた。

……普通のお母さんたちだったら、嬉しく思つたが、如何せん、クイントさんはいつの母さんと同じで、料理が下手だ。

なので、俺の家は父ちゃん、レーンたちはゲンヤさんが、料理を作っている。

この間、レーンたちの家で、クイントさんの料理を食べたのだが……
…一瞬で意識を失った。

そして、田を覚ましたのが夕方頃だったといつ記憶があつた……。

まあ、そんな、暗黒の記憶は置いといて。

「せじと、最後は俺たちだな、セリフ」

俺がそう呼びかけると、セリフは仰々しく立ち上がった。

そして、ゆうべはクイントさんに近づき、包装された箱を渡した。
ピンク色のドレスを着たセリフが両裾を軽く摘み、姫様のよつてお辞儀をする。

「これは、私とコンクとレーンが選んだ、プレゼントです。 どう
か、使ってください」

「開けてもよいかしら?」

「はい、どうぞ」

クイントさんは恐る恐る包装を外し、そつと箱を開けて、俺たちが
買ったロケットペンダントを、大事に、に、皆に見えるように掲げた。

「まあ、中々の物だな……」

レジアスさんは自分の髪を撫でながら、そう褒めてくれた。

それに同意なのか、娘さんであるオーリスさんも、みんなも、頷いてくれた。

「スバル、ギンガ、レノン、それとリンクくんも来て」

クインントさんが、俺たちを呼んだ。

もしかして、気にいらなかつたか…………？

俺は頭を捻らせ、傍に寄ると、

クインントさんが、俺たち五人を一斉に抱きしめた。

『つー?』

「あらがとう、最高のプレゼントよ」

クインントさんは本当に綺麗な笑顔を、俺たちに見せてくれた。

それを見ただけで、このパーティを開催して、本当によかつた。

プレゼントを渡した終えたあと、俺たちは時間のことなんて気にせず、楽しくパーティを過ごしていった。

第6話（後書き）

2011も頑張っていきます！

第7話（前書き）

今回またのまのへ 路線でこじりつと黙つて書きました、

リンクside

『夏休み』……それは学生にとっては嫌いな授業を休みにする休暇のことである。

しかし、『夏休み』に入ると同時に、嬉しくもないものまで付いてくる。

それは……宿題である。

そして、現在、俺の家で、そして俺の部屋にある正方形型のテーブルの周りに座っているのは、俺とセラとレノンだ。

「うう、難しいよ～」

セラは涙目でテーブルの上にある問題集に突っ伏す、その姿に俺とレノンはため息付いた。

「ほひ、セラ。早くせりなこと……

「うう～」

「……愈つても、宿題は無くならないよ

愈つ出したセラはソレで元気にならなかったよ」と言つた。

やれやれ、仕方ないな……。

「しょうがないな、これ以上やらないなら、教えても意味ない。レホン、やつとかえ……」

「「」めんなさい… やつますー。」

セラはガバッと突つ伏した頭を上げて、問題集に取り掛かった。

ふつ、楽勝だな。

「……………、やつぱりわからんないよ~」

……前言撤回、やつぱり面倒くさい。

そもそも、俺たちは一体何をやつしているのかと言いつと、夏休みの宿題である。

別に今日が夏休みの最終日といつ訳ではない。

むしろ、まだ始まつたばっか、といつが初日だ。

なぜ、今、宿題をやつしているかと言いつと……セラのせいである。

彼女は宿題を溜め込むタイプであり、去年の夏も最終日になつて、セラは俺たちに助けを求めた。

唯一まともにやっていた宿題は、工作ぐらいだつたな……。

それぞれの科目の入つた、問題集のほとんどが真っ白だつた……あれはひどかったな。

俺たちは必至にセラにヒントを出したつたり、問題の答えを出してつたりして、やつと付けたんだよな……地獄だつたな、うん。

「仕方ないな……それじゃあ、ヒントを言つから、自分でやつてみるよ? 俺たちがやつたら、意味ないしな」

「うそ……」

セラは頷き、問題集に取り掛かった。

?

問題:『線路の上を列車が走る』と云つかん字をひらがなにしなさい。

「せざるのじよつをれつしづがはしるへ

「わなわかんないよ、せんりのじよつて! そんでもつて、れつしづてなに! 」

「セラ、『上』をじよつて読むな、そんで、れつしづの『つ』を

「おしゃべり」

そう言つと、セラは、「わかつた！」と言つて、書き始めた。

見てみると、ちゃんとした答えになっていたので、OK。

次だ、次

問題：『汽車はせきたんで走りますか』 せきたんといひひがなを
かん字にしなさい。

「あつ、こうかな？」

セラが答えを回答欄に書いたので、見てみると。

序

「なにその漢字！？」 なに、席炭って！？ ビーフヒルの意味だよおお

おおおおー!?

「それは同意見だけども、落ち着け。
はいるけど、前半はまつたく違うぞ」

ヒントを言つのも、バカらじーので、答えを書くと、セラは恥ずかしそうに書き直した。

？？？？？？？？？？？？

問題：333個の五円チョコを買いました、そして更に45個の五円チョコを買いました。これらを買った分をたすと、何円ですか？

読み終えたセラは、首を傾げながら、一言。

「333×45？」

「問題をよく見なよ！？ ビニコロかけてみなセー』ってあんの！？ というか、なんで次のページから、算数になるの！？ さつきやっていたのつて、国語だよね！？ わけわかんないよ、セラの答えもそただけど、この問題集も！」

激しいツッコミを入れる、レノン。

そんな彼を、落ち着かせる様に、肩をポンポンと軽く叩いた。

「……セラ、レノンの言ひ方とおつだぞ。最後になんて書いてある？」

書かれてある文を指すと、セラはまた恥ずかしそうに、答えを書き

始めていった。

問題：次のかけ算をしなさい

$$20 \times 5 =$$

$$30 \times 2 =$$

$$45 \times 6 =$$

$$55 \times 3 =$$

$$73 \times 9 =$$

ああ、これは無理だな、うん。

そう思っていた、次の瞬間。

$$[100, 60, 270, 165, 657]$$

すりすりと答えを出した、セラ。

「うめん、絶対に間違えるなって思った、僕を許して」

「…………セラ、俺はお前を誤解していたよ、やればできる子なんだな」

優しい笑顔を浮かべながら、俺たちはそういつづつ。

「二人ともひどいよ！ 私だって、ちゃんとできるもん！…」

涙目で俺たちに訴えるセラ。うん、悪かつたつて、だからそんな目で俺たちを見ないで。

そんなこんなをしてじるつむじ、「氣付けば、もう夕方になっていた。

固まつてしまつた身体をほぐすために、軽く伸びをする。

「…………ふわあ」

セラは軽い欠伸をすると、それに続くようにレノンも欠伸をした。

そして、俺も釣られるように欠伸をしてしまった。

「…………眠いね」

「…………ううで、寝ない？」

「…………賛成だ」

俺たちは、軽い言葉のキヤツチボールをし終えると、仲良く揃つてベットの中に入り、仰向けて横になつた。

そして、すぐさま、眠気が襲い掛かり、瞼を閉じてしまった。

ルークside

「レノンマーくん、セリナちゃん、お迎えが…………」

リンクの部屋の扉を開けてみると、ベットの布団が盛り上がりつているのが分かる。

僕はそつと近づいてみると…………、

『…………』

三人が仲良くすやすやと熟睡していた。

なんだか、起きるのを躊躇つてしまつぽじ、可愛らしく寝顔で。

「…………起きるのを、待つててもらおうかな」

迎えにきた彼、もう寝顔でひびきで躊躇つてしまつ。

だから、彼らこま、もつまよつと、待つてもらおう。

僕はゆっくりと部屋から出て、そつと扉を閉めた。

軽い足音を立てながら、部屋から離れていった。

こつも短くてすこません……。

本文

四方を高い木々に囲まれた森の奥、その場所には様々な色合いの花が咲き誇っていた。しかしその花々のなかには季節ごとにしか咲くことのない花もあった。

その中心には、石で作られたであるひ台座が備えられており、台座には美しい輝きを見せる一振りの剣が突き刺さっていた。

すると、その剣から白い影が生まれ、それは女性の形を作った。

女性は地に膝を着け、祈るように両手を組んだ。

「…………何だ、あの夢」

自身を象徴するかのように鳴り響く田舎まし時計を止め、俺はさつきの夢の内容を思い出す。

森のなかにある剣と女性……あれは一体何なんだ?

だけども、考へても考へても思い付かないのと、考へ止めた。

俺はTシャツと長ズボンに着替えて、一階のリビングに下りたら、誰もいなかつた。

「あれ？」

いつもなら、料理を作つてこる父さんがいるはずなのに……。

リビングにあるのは、サランラップで包まれてこる朝食と一枚の紙だつた。

それを手に取り、見てみると、

『今日は、大型スーパー『ディマンド』の特売日なので、出掛けてきます B ヨルーク』

……そういえば、昨日、寝る前に、父さんが真剣な顔でチラシに書かれている商品を赤ペンで書いてたな。

なるほど、その目的のために、朝早く出て行つたわけか。さすがは主夫だ。

「さてと、暑いけど、どこかへ出かけようかな」

今日は、アルスさんの特訓はないから暇なんだよな。ゲームセンターに行こうにも、一人でやつてもつまらない。

いつも一緒にいるレノンは家族と一緒に出かけていき、セラもレクノールさんと一緒に買い物に出かけて行つた。

とつあえず家にいてもつまらないし、どうかへ出かけよつと。

……暑い、暑すぎる。何なんだ、この暑さはよ。

やつぱり、家にいたほうがよかつたかも。

滴る汗をぬぐいながら、ため息をつくと、チラッと見えたのが、大型の総合スーパー『ディエンダー』だった。

「……涼んでいいつと」

俺はそう呟いて、その大型の総合スーパーのなかに入つていった。

* * * * *

「……どうしよう

私は大勢の人が歩んでいるなか、ただ呆然と立つていて、周りを見渡した。

やつぱり、いないなあ……。

「どうしよう、まさか迷子になつちゃうなんて」

周りを見渡しても、あの特徴的な色の髪のあの人はない。

私はあの人を探すため、歩き出そうとしたとき、

「？ もしかして、フュイト？」

「え？」

幼い男の子の声で、私の名前を呼ばれたことに驚きを露さないで、後ろに振り向いてみると、

「やつぱつ、フュイトだ。 どうしたの、こんなところで？」

先日は、会つたばかりで、危険を顧みず、私のリボンを取つてくれた男の子……リンクがいた。

第8話（後書き）

アインハルトはもしかしたらまだ当分出てこないかもしません。
…マジでいません！

第9話（前書き）

更新が遅くなってしまって申し訳ございません。

今回も短いのですが、よろしくお願ひいたします。

フェイトと再会した俺は、彼女を連れて、ディエンダーの中にある喫茶店に入った。

フェイトにはカフェオレを、俺はブレンドコーヒーを注文し、今は椅子に座っている。

注文の品はすぐにやって来て、今は俺たちの目の前にある。

「なるほど、色々なものに興味を惹かれていて、周りをキョロキョロしていたら、その人を見失ったんだ……」

「うう……」

フェイトは恥ずかしそうに額を、カフェオレを飲む。

別に、恥ずかしがることはないと思つ。このディエンダーは結構広い上に、色々な商品が置いてある。

それらに目を向けては、迷子になるだなんてのは、子供の頃にはよく経験するものだ。

「まあ、これを飲んだら、その人を探しにいこつか

「え？ 探してくれるの？」

「当たり前だろ、こんなだだっ広い場所で、一人を探すだなんて、無理だ。それに、君を放つては出来ないからね」

ブレンジドコーヒーで口の中を潤し、フェイトがウイーンする。

「あ、ありがとう」

フェイトは頬を赤く染め、カフェオレを飲み、俺も残っているブレンジドコーヒーを飲む。

それを何故かフェイトが驚きで田を見開いていた……なんでだ？

「リンク、それって苦くないの？ ミルクと砂糖入れた方がいいんじゃないかな？」

「ん？ 慣れればおいしいよ、フェイトにはまだ無理かもな

まだ、フェイトは子供だ。子供の味覚で、このブレンジドコーヒーをおいしいだなんて感じることなど無理だらう。

病院生活をしていた俺は飲む機会はないと思われがちだが自販機で買って飲んでいる。

そして、時たまに自宅休養の許可が出て、家に帰る途中、よく姉さんと一緒に、喫茶店に行くこともあるのだ。

しかし、フェイトが俺の言葉に怒りを覚えたのか、

「む……飲めるよ！ うつと貸して！」

「え？ べ、別にいいけど」

フロイトは、ブレンズルコーヒーの色で難しい顔をしたが、すぐにブレンドコーヒーを口に含むと同時に、

「う、うう～、苦～～」

涙目でフルフルと震えだした。 やっぱり、子供にとっては苦いようだ。

「だ、大丈夫か？」

「う、うん……」

フロイトは口元を抑え、カフュオレで口直しをする。

「だから、やめておけばよかつたのに……バカだな」

「あ～……」

俺はブレンズルコーヒーを取り上げ、それを飲む。

「うん、この苦味がおいしいんだよな……。

「この味を理解するには、お子ちゃんには分からないな

類を膨らませながら悔しそうに睨みつけてくるが、あまり怖くない。

「む、むうう～～～～」

それに苦笑しながら、ブレンンド「バー」を飲む。

「セーフ、怒つてこる暇はないだろ。早く飲みなよ、お子ちゃん

」

「ハ、ハハ~~~~~」

より一層、俺を睨みつけてくるが、あまり怖くないのと、笑って受け流した。

* * * * *

「ビ」で離れたのか分かるか?」

「確か、三階で……」

「了解。 そんじゃあ、行つてみよ!」

喫茶店から出た私たちは、三階に行こうと歩みだそつとしたとき、

「パパ~、動かないよ~」

「うーん……もう古くなつたからかもな

その会話を偶然耳に捉えてしまい、そこに振り向いてみると、スーパー袋を持った男の人と女の子が一つの玩具を見ていた。

会話を聞いていると、女の子の持つているネズミの玩具 外見は既にボロボロになつており、動くのが不思議なくらいなもの 動かないでいるよつ……。

「よじり、新しいのを買おうか。それまわい……」

「いや、捨てない」

男の人が『捨てよう』と言つ前に、女の子はすぐさまそれを否定した。

「パパが買つてくれたものなんだもん！ 捨てない！」

「うーん、でもねえ……」

「横槍失礼」

隣にいたはずのリンクがすぐさま女の子の持つている玩具を手に取つた。

は、はやいっ。 一体いつの間に……。 ?

私は慌てふためいてリンクの傍に小走りした。

「な、なんだ、君は？」

「おじ……お兄さん、買つたばかりのドライバー借りますよ

いま、おじさんって言いかけたよね、リンク。

リンクはドライバーで玩具のボトルを取り始める。

すりすりとボトルを取り出したあと、玩具の蓋を取り出し、その中

を覗き込む。私もそれに続くようこそそれを覗き込んだ。

ゼンマイの歯車が、埃だらけになつており、中には小さな石が引っかかっていた。

リンクはゆっくりと息を吹きかけて埃を吹き飛ばし、指で石を取り上げた。

全てが綺麗になつたあと、リンクはボトルを差し込んで、玩具を元通りにした。

「リンク、これで動ぐの……？」

私がそう尋ねると、リンクは笑う　その笑顔を見た私はドキッとした。

「まあ、見てなつて」

リンクは玩具の側面についている軸を何回か廻し終えると、

「わあ！　動いた動いたあ！」
玩具はちゅーちゅー鳴きながら四足歩行になつて、足を動きだした。

「よかつたな、動きだしてくれて」

「うとう、ありがと、お兄ちゃん！」

リンクはもう言つて、女の子の頭を撫でる。

それに何故か私は嫌な気持ちになつた……ただリンクが女の子の頭を撫でているだけなのに。

ビーハー、こんな気持ちになつてしまつんどう。

「放つて置いて、『めんな。 わあ、行くつか』

リンクの声が聞こえたのと同時に、リンクの手が私の手を掴んだ。?

それと同時に、嫌な気持ちから嬉しいのか恥ずかしいのか分からない気持ちになつた……なんなんだるつこの気持ち。

リンク side

ディエンダーの三階は衣料品を取り扱っている。？だからだろうか、その階には結構な人数で賑わっていた。

衣料品を取り扱っていることなのか、女性の数が多い。フェイトの探している人が男だつたらいいけど……。

「フェイト、お前の探している人は男の人か？」

「ううん、女の人だよ」

ううむ、それだつたら、探すのも一手間かかるな……。見る限り、女性の数が多いから…… そうだ！

「それじゃあ、何が目立つ特徴的なものないか？ それだつたら、見つけることができるかもしないからさ」

「ええと、特徴的なもの……髪が翠色でボーネールにしている人」

「おお、そんな目立つ特徴だつたら、見つけ出すことができるかもしれないな。

ただ、条件は、この階にいるのかということだ。もしかしたら、フェイトを探すために、上の階か下の階に行つてゐるかもしない。

まあ、とつあえずは「」の階から探し出すわ。

結果は残念でした。

「」の階のあたりを周つまくつたのだが見つけたのができなかつた。そして、ずっと歩き通しだつたので疲れてしまい、今は階段側に備えられているベンチに座つていてる。

「参つたな、一体どこに行つたんだが」

「……」めんね、リンク

いきなり謝つてきたフュイト、「俺は疑問を浮かべながら彼女の方に振り向いた。

「？ なんでいきなり謝るんだ？」

「……私の所為でリンクに迷惑かけているから……」

「いや、迷惑かかつてねえよ」

フュイトの言葉をバッサリと切り落としたあと、おもこつさつフュイトの額に「」。

「あつひー。」

赤くなつた額をさすり、涙目で俺を睨みつけるフュイト、「俺は苦笑しながらも怒氣を膨らませながら言葉を紡ぐ。

「あのなあ、俺がいつ迷惑かかったなんて言ったよ。それに、俺はどうせ暇だつたんだ、探してやる」とくらこしてやる……。いや、暇じゃなくても助けているかな」

「え？」

「だつて、俺たちはもう友達だろ？」

俺がそう言つた瞬間、フェイトは驚きのせいか目を大きくしていた。
……なんだ？ 俺はなにか変なことでも言つたか？

「？ どうした？」

「と、友達……リンクと私が……？」

「おうよ。まだ名前を呼び合つたが、喫茶店で一緒に飲んだ程度
しかないけど、じつして仲良くなつていてるんだから、一応は友達だ
ろ？」

「う、うん！ セウだね！ もう、友達だよね！」

フェイトは嬉しそうにこくへこくへと頷いた。 そんなに嬉しいか……？

* * * * *

フェイト side

リンクと友達になれるなんて……すくなく嬉しい。

心の中で溢れ出る嬉しさで、私は笑ってしまつ。

「？ どうした？」

「え、な、なにもないよ」

リンクはせつかと言つて、私の手を握る。温かい温度が伝わつてくるのと同時に、恥ずかしさが混み上がつてくる。

「それじゃあ、行こいつか」

私は「うん」と言おうとしたとき、

「ど、泥棒――――！」？

女の人の叫びに、私とリンクは思わず叫んだ方向に振り向いた。

見ると、男の人が見るからに高そうなバックを抱えながら走つている姿が見えた。

リンクはすぐさまトライエスカレーターの近寄つて通せんぼのよう立たち塞がつた。

「どけええええ、ガキイ！」

「リンク！」

そのままじゃ、リンクが男の人に突き飛ばされちゃうつー。

でもつ、バルティッシュがないから、私は只の子供だ。

……それでも、リンクが傷つくのは見たくない！ なにか、あの人
の気を逸らすものがあればいいけど……あ！

私の目に留まったのは、空カゴだった。

私は両手でカゴを持ち、思いつきり投げ飛ばした。

投げ飛ばしたカゴは、運良く吸い込まれるように男の人の顔に叩き
つけられた。

「んぎやー！」

男の人は悲鳴を上げて、顔を両手で押さえる。 その隙に、リンク
は男の人に近づいて、男の人の首筋を殴り付けた。

「Good Night……」

男の人は口から泡を噴き出しながら倒れた。

「……ふう、フェイド」

リンクは一息着くと、私を呼ぶ。 私はリンクの傍に駆け寄ると、
リンクは優しく微笑んで、私の頭を撫で始めた。

「サンキュー、助かったよ」

「……あ」

温かい温度が伝わってくるのと同時に、顔が熱くなり、恥ずかしさが出たけども、そんなことよりも…………。

「えへへへ

リンクにお礼を言われたのと、撫でられたので、嬉しく感じた。

* * * * *

リンク side

ひつたくりしたおつせんは警備員さんによつて連れていかれた。

それを見送つた俺たちは、フェイトの知り合いを探すために、再び歩き出そうとしたとき、

「フェイトさん！」

女の人の声が聞こえた方向に振り向くと、そこには、翠色の髪がポニーテールにしている女性が息を絶え絶えにしながら立つていて、姿があつた。

フェイトの言つていた特徴的なものが揃つていて、この人がそうなのだろう。

「見つかってよかったです、それじゃあな

「あつ！ リンク！」

下りエスカレーターに足掛けようとしたとき、フェイトが俺を呼んだ。

顔だけを動かし、振り向くと、フェイトは頬を赤く染め、もじもじしながら言つ。

「また、会えるよね？」

「……もちろん。今度は、俺の友達も紹介してやる」

そう言つて、俺は自分の携帯の電話番号が書かれてある一枚の紙を投げ渡した。

「暇ができたら、電話してくれよ」

「あ……うん、絶対にするから！」

フェイトは強く頷いて、可愛らしい笑顔でそう言つてくれた。

俺も笑顔で返し、腕を振りながら、去つていった。

第10話（後書き）

といつあえずは、フラグは立てておきました
更新は遅いですが、よろしくお願ひします。

第1-1話（前書き）

久しぶりに、アクセス解析を覗いて見たら、何とPVが104420になつてありました！ これも、みなさんのおかげです、ありがとうございます！ これからもよろしくお願ひ致します！

リンク side

“ディエンドーを出たときは、もう毎日過ぎており、13時前後。フェイトと一緒に探していたので、結構な時間が過ぎていたんだな……。通りで、お腹がなつていいわけだな。

どこかご飯食いに行くわけでもないから、家に帰る。多分、今頃、父さんが家に帰ってきて、冷たいお昼ご飯を作ってくれているだろう。

俺は、早く帰るため、駆け足となつて、家路に急ぐ。

家路の途中にある、商店街を通りていると、福引屋がやつているのに田に止まつた。

それによつて、俺はポケットの中を探る。確か、父さんと一緒に、スーパーで食品を買った時に、買った福引券があつたはず。ポケットから取り出して、見てみると、三枚の福引券があつたのはあつたのだが、期限が今日までだつた。

このまま、期限切れになつて捨てるのも勿体ないし、無駄だと思つけど、やってみるか。

「おじさん、もう少くお願ひします」

「おひよ、三枚な。
そんじゃ、三回、クルクル回してくれや」

そう言つて、おじさんは抽選機を俺の方に引き寄せてくれた。

「残念。ポケットティッシュだ」

……うん、まあ、分かつてはいたけど、残念な気持ちになるな。

苦笑しながらも受け取つて、再び回転させる。

次に出てきたのは、黄色い玉だつた。

「黄色い玉は商品券3000円だ、お母さんに上げな」

俺の家の場合は、母をんじやなくて、父をんが喜ぶんだよな。

おじさんから白い封筒を受け取ると、俺はポケットの中に入れ。？最後の一回に期待しながら、俺はクルクルと回転させた。

そして、出てきたのは……………金色の玉だつた。

まさかの一等を当ててしまったので、俺は思わず大きな叫び声を上げてしまった。

大

「……………というわけなんだ」

目の前に座つて、昼食の素麺を啜つている父をなんとう言ひ、頬が思いつきり膨れ上がって、咽せた。

「げほつ、げほつ、がはつ、ぐほつ！ ほ、本当のかい、リンク！」

「本當だよ、ほい、証拠」

そう言って、俺は一枚の封筒から、あるチケットを取り出して、父さんに手渡した。

父さんは、そのチケットを、じつと見つめる。

「管理世界」『ガイアーミュール』での次元旅行券、十名様まで。

「偽物じゃないよね？」

「その言葉、俺も福引屋さんのおじさんになつたけど、本物だつて言つてたよ」

まさか、次元旅行券を、タダ当然に手に入れてしまつたんだからな。思わず、おじさんになつてしまつたよ。

「はあ、すじいな、リンクは」

「いや、ただ運がよかつただけだつて。 それで、その次元旅行……レノンたちも誘つていいかな?」

まさかの、十名まで誘える旅行券を当ててしまつたのだ。流石に、俺たち家族だけつていうのは、寂しい。 ?俺自身、レノンとセラたちを誘つて、一緒に旅行がしたい。 ?

しかし、それを決めるのは、父さんや母さんなのだ。子供である俺が決めていいわけじゃない。

だから、父さんに聞いた。 レノンたちを誘つてもいいのかを。

「うん、いいよ」

「……え? いいの?」

「もちろんさ。 マリカも『みんなで行つた方が楽しいわ』つて言つと思うから、大丈夫だよ」

健やかな笑顔でそう言つてくれる父さんに、俺は笑みを溢しながら、「ありがとう」「って礼を言つた。

ちなみに、夜に帰ってきた母さんに旅行の件を言つたら、絶叫を上げた。そりやそつだよな、息子が次元旅行券を手に入れたんだからな。？

そして、その次元旅行にレノンたちを連れてつていいかを、母さんに聞いたら、父さんの言ったとおりに、了承をしてくれた。??

リンク side

俺が次元旅行券を手に入れてから、三日が経つた。

今、俺たちは管理世界【ガイアミュール】に行くため、時空空港にいる。

【ガイアミュール】に行くメンバーは、俺たち家族、レノン、セラ、ランスター兄妹、エクレールさん、そして、

「いや、ルークさん。申し訳ないですね、私たちまで誘っていた
だいて……」

「いえいえ、お気になさらないでください。たまには、息抜きを
してくださいね」

「『めんなさいね、マリカ……』

「別にいいわよ、この旅行でゆづくりしなさい」

セラとエクレールさんの両親……リューグさんとノエルさんである。

この一人を見たのって、確かに半年ぶりだつたじゃなかつたっけ……。

この一人は、共働きをしているから、この旅行でリラックスして
ほしいものだな。

ちなみに、ナカジマ家は仕事が忙しく、姉妹は仲良く風邪を引いて

しまつたようで、行けなかつた。？他の人たちは、仕事によつて、行けないとのこと。まあ、仕方のない事である。

「リンク、リンク、あれ見て」

セラが面白そうに俺に声をかけ、ある方向に指差す。俺は何だらうと思いつながら、セラの指差す方向を見ると。

「おりょ……」

そこには、レノンの腕に抱き付いて、嬉しそうに元気にしてくるトイアナの姿があつた。？

「おおいつ、ラブラブだねえ」

「熱いね～」

俺とセラは、顔を見合させて、ニヤニヤと笑つ。

「お前らつて、意外と腹黒いな……」

ティーダさんは頬を搔きながら苦笑する。何を言つているんだ、ティーダさん。殆どの人は、ああいつのを見ると、ニヤニヤ笑つてしまつもんだぜ。

「まあ、いいじゃないですか、ティーダさん。（こずれ、あいつもあなるから、今のうちに笑わせてあげましょ～）」「

「ま、そうだな。（……やう考へると、あいつが哀れになつてきたぞ）」

なんか、エクレールさんとティーダさんが、物騒なことを囁つて、
るよつたな気がするが、氣のせいだらつ。

そつ心の中で納得させ、俺はセリフと一緒に再び「ヤーヤーヤしながら、
レノンとティアナの姿を見る。

すると、レノンは、俺たちの視線に気がついたのか、頬を真っ赤に染
まつてしまつた。

* * * * *

レノン side

なんだか、生暖かい視線を感じるので、その方向を見てみる。

そこには、リンクとセリフが、ニヤニヤしながら、じつじつを見ていた

……

まづい！ あれば、絶対に飛行機内でからかわれる可能性が、確實
にある！ それを避けるには……、

「レノンお兄ちやん？」

「ティアナちゃん、ぼ、僕の腕から、離れてくれないかな？」

「え……もしかして、レノンお兄ちやん、ティアナのこと嫌いにな
つた？」

「あ……こや……」

僕の言葉に傷ついたのか、ティアナちゃんは涙田になつた。 むつ
……可哀想だけど、無理矢理にでも…………！？

ティアナちゃんから離れようとしたら、急激に背中が寒くなつた。
僕は、それで思わず固まつてしまつた。

「……レノンお兄ちゃん？」

「えっ、ああ、いや、僕は、ティアナちゃんのこと好きだよ。 だ
から、このまままでいこよ」

「ほんとっ…？ レノンお兄ちゃん、大好き…！」

ティアナちゃんは嬉しそうに、僕の体に抱き付いてきたと同時に、
背中の寒さがなくなつていぐ、一体何だつたんだ……。

* * * * *

リンクside

よしよし、へつこいたな。 あのまま、離れたら、つまんななくなる
からな。

もつひとつだけ、楽しませてもいいぜ、レノン。

「……お前つてやつせ」

「エクレール、何を囁つても無駄だ、やめられて」

ハイハイ、無視無視。もづ、俺はお一人のため息なんぞ聞こえないよ。

ただ、セリと一緒にニヤニヤしているだけだからな。

「うるさい、ラブリーフだね」

「いやー、暑いなあ。羨ましいなー」

俺は一人を見て、笑いながらひたすら囁つと、セリが驚愕な表情を浮かべながら、じつちを見る。

なに? なんか、変なこと囁つた、俺?

「……羨ましいの?」

「ああ、俺もティアナちゃんと同じことしてみたいなーって思つよ」

前世では、いつも病院生活を送つていった上に寝てばっかだから、抱きつかれたことはあるものの、ああやつて抱きつくなつて、やつたことがないんだよな。

「……あ、じゃ、じゃあ、私たちも、やつてみる?」

「ん? いいの?」

「う、うそ……」

セラの言葉に甘え、遠慮なく俺はセラに抱き付いた。

「！？」

「ふん、じつじう感じなのか」

意外と密着するもんなんだな、それに甘い匂いも漂つてくるし、男の俺と違つて、柔らかい。 恋人同士がやるのも、分かるかもしけないな。

「…………　おい、リンク。いい加減にセラを離してやれ、死にかけているから」

? どういう意味だ? ハクレールさんの言葉に、そんな疑問を残しつつ、セツから離れてみると、

卷之二十一

セラが頬を真っ赤に染まりながらも、どこか幸せそうに微笑みながら、気絶しかけていた。

— ! ?

そんな一人の姿を見ている、エクレールとティーダは、ため息をついて、こう呟いた。

「「やれやれ」」

さらには、そんな子供たちの両親である母たちは、どこか面白げな笑みをしていた。

「うふふつ、セリッたら、自分から誘つたくせに、氣絶しちやつたわね」

「我が子ながら素晴らしいと思つわ」

そして、父親たちは、そんな母たちを苦笑しながら見つめていた。
？？

第1-2話（後書き）

今回は、リンクがちょっと羨ましいかも…………それは冗談ですvv
リンクは恋愛に関しては、かなりの子供レベルです、だから20歳
でもああも簡単に抱き付くことが出来ます。

第1-3話～旅行編？（前書き）

今更な通知なんですが、リューグとノエルはオリジナルキャラクターでございます。

『ガイアミコール』？

そこはミシドチルダのような先進都市ではなく、人と自然がともに暮らす世界であり、古き良き暮らしを愛する者たちが暮らす世界である。

この世界にたどり着いたあと、リンクたちは山と海に挟まれた街『ルミナス』にやってきた。？この街の高級ホテルに泊まり、二泊三日の楽しい旅行を楽しむのだ。

リンク side

ホテルのチェックインを終えた俺たちは海岸までやってきた。

勿論、海に来たので、格好は水着である。

「うーん、自然の香りが気持ちいいなあ

決して、都會では嗅ぐことのできない、気持ちが安らぐような匂いを俺は思いつきり吸い込む。

「何だか落ち着くな……」

俺は背筋を伸ばすと同時に、

「ふつー！」

バシャっと顔に冷たい水が掛けられ、塩つ辛い味が口の中に広がった。

「あははは、リンカー、早く来なよー」

セラは笑いながら、水鉄砲を俺に向かながらそりゃー。

その近くには、レノンと、浮き輪にしがみついているティアナの姿もあった。

なんだか気持ちよさそうにしてるので、俺も海の中に入りたくなってきた。何より顔にかけてくれたお礼をしなくちゃいけないしな。

俺はニヤリと笑いながら、両手で海水を掬つて三人に掛けたあと、三人の近くに思いつきり、ダイビングした。

* * * * *

リンクが飛び込んだことで、水柱が上がり、セラたちは悲鳴を上げてはいるが、どこかその悲鳴は楽しげに聞こえる。

「ふふつ、みんな楽しそうね」

「ええ、改めて来てよかつたと思つわ……」

マリカとノエルは子供たちが遊んでいる光景を微笑ましげに見つめていた。

「おお～、はしゃいでいますね」

「子供の力を舐めちゃいけないって、改めて思うね」

リューグとルークは画面に見ながら、手元にある缶ジュースを飲む。

「うつは、すげーな」

「……あそこに行ける勇気ありますか、ティーダさんは」

「いや、俺はちょっと遠慮してえな……」

一組の両親とは対照的に、エクレールは引きつった笑みで、ティーダはおつかなびっくりという顔で、子供たちを見ていた。

それもそのはず。子供たちは、物凄い勢いで海水を掛け合ったり、鬼ごっこをしたりしているのだから。

はつきり言って、エクレールとティーダはあそこに行く勇気が湧かない。もし、自分たちがあそこに行ってしまったら、自分たちはおそらく明日の朝は筋肉痛になるかもしねい……。

いや、ティーダは大丈夫だろうが、エクレールは確実に筋肉痛になるだろう。

「わたしもなんだか混ざりたくなってきたわ

マリカは腕を軽く伸ばしたあと、笑みを浮かべながら、走つて行つた。

？
「それじゃ、私も行くか、久々にセラと遊べるからな

「わづね、行きましょうか

リューグとノエルは互いに微笑みながら顔を見合わせる。

リューグの言つていた『久々に』 ところのは言葉どおりの意味である。

この一人は地上管理局の陸上警備隊、しかも災害部に所属していることで、家に帰れるのは、ごく稀に等しいのだ。

「さてと、エクレールも行くぞ

「ええ！？ 私も！？」

「あら、あれで怖じけつにちゃつたの？ 情けないわね」

「むつ……怖じけつてなんていない！ 行こう！」

……その数分後には、エクレールは後悔した。だが、この旅行に来たみんなは笑顔でこの楽しい時間を過ごして行つた。

リンク side

海水浴を楽しみ、ホテルで一休憩を入れたあと、自由解散となつた。レノンはティアナの要望でティーダさんと一緒に買い物のをしにいき、セラは家族と一緒に観光しに行つた。？……エクレールさんはゾンビのようにフラフラしていたが。

そして、俺は今どこにいるのかといつと、ルミナスの露店街を散策していた。

ちなみに、父さんと母さんは、ホテルで一人つきりにさせてあげている。

最近、あの二人は、イチャコラしていないうつからな。

しかし、俺一人で行つてくるつて言つたら、父さんと母さんは俺を引き止めようとしたが、

「迷子にならないように気をつけるから、大丈夫だよ

？確かに見知らぬ街だけど、迷子にならないように気をつけて、地図も持つてるし。

それでも、俺一人で行く事に決っていたが、そこはなんとかねじ伏せた。

それとおまけで二つ言い残した。

「新しい家族、期待しているよ」

それを言つてドアを締め切つたと同時に、母さんの声にならない悲鳴が聞こえた。

……お盛んなのは構わないが、せめて静かにやつてほしいものだ。
だつて、父さんと母さんの部屋の隣に、俺が寝てるんだ。精神
年齢20にひとつはキツイ。

まあ、その分、新しい弟妹ができるのを期待させてもうつていてるが。

それはさておき
閑話休題

しかし、ルミナスの店は色々なものが売つてゐるな。樹で作ったお守りとか、アクセサリーとか、採れたて新鮮の野菜に魚までもが売られているんだからな。

ミッドチルダじゃ、決して売られないであらう商品たりである。

「おっ」

とある露店店で、田に惹かれたのは、樹で彫つて作られた手裏剣型とダイア型にハート型ペンダントがあった。

俺はそれをどこか気に入り、これを両親へのサプライズプレゼントとして手渡した。

「すいません、これいいですか？」

「あこよ、三つで8000円だ」

「ちなみに、この世界での【田】はジョンと書われるお札である。

俺は空港で変金したジョンを取り出し、おばちゃんに手渡す。 おばちゃんは一つは可憐らしく袋で包み、手裏剣型のペンダントは俺の首に掛けてくれた。

「あつがとうござます」

「あじよ、気をつけてね」

おばちゃんの言葉にて、頷き、俺は歩き出した。

露店街を歩き終え、俺は先にある木の階段を上り、森林公園へと入つていった。

* * * * *

そこは、樹の香りが漂い、心を落ち着かせるような雰囲気を漂わせていた。

「いい香りだ……」

その香りを、俺は思いつきり吸い込んで、この空氣を味わう。うん、美味しいな。

周りの景色を楽しみ、俺は散歩していると、そこで一つに分かれた道があった。看板には右は普通の子供が遊ぶ遊具広場があり、左は遺跡の扉があるというのが書かれていた。

遊具には興味がないし、左に行つてみるか。そう判断をした、俺は左へと進んで行つた。

歩いてから、わずか数分で、遺跡の扉にたどり着く。

「おお～」

縦長さ一メートルの石造りの扉がそこに佇んでおり、その扉の表面には紋章のようなものが掘られおり、古代の雰囲気が漂わせていた。

しかし、それ以外は何もなさうなので、すぐさま飽きてしまった。さつと帰ろうと、遺跡の扉に背を向けると、

「私のもの……来て……」

「？」

何かの声が聞こえた、でも周りを見渡しても、誰もいない、ここは俺しかいない。

まさか、幽霊……………？？

いや、それはないか…………幼いころはまともにそれを信じ込んでしまつたが、流石に14歳になつてみると信じられなくなってきたし。

俺はそう決めて、この場を去つて行つた。

第1-4話～旅行編？（後書き）

リンクくんは病院の中でも勉強をしていたので、子供の作り方ぐら
いは学びましたよ。 あくまで教科書の知識なので、深くまでは
……。

ホテルに戻り、部屋に入った俺が見たのは、服が若干はだけ、頬を真っ赤に染めた母さんと、幸せそうな顔をしながら気絶した父さんの姿があった。

「あー！ リ、リンク！ お帰りっ！」

「…………ただいま」

なにをやっていたんだとはあえて聞かないでおじい。

やつしたせうが母さんことひまありがたいだひつ、やつだ。

「母さん、これ」

やつせ、買ったハート型ペンドントの入った袋を母さんに渡す。

「これね？」

「プレゼント、やつも買つてきたんだ」

母さんは袋を開けて、ハート型ペンドントを取り出すと、俺の頭を撫でる。

「ありがとう、嬉しいわ、リンク」

「えへへへ、びうこたしました」

それをやられると、恥ずかしさと、照れくささの、一つを感じてしまつ。それを感じてしまつといつとは俺もまだまだ子供といつことなのかな……。

「ただいま」
「ただいま、戻りました」

母ちゃん、服整えてね

」? ? ! - 」

流石に、服が若干はだけたまま、皆に会つてもうつては困るからな、
そこを指摘させてもらひ。

母さんは慌てて、服を整え直し、ひとつか箇の田を誤魔化すことが
できた。

ちなみに、皆は、何故父さんが幸せそうな顔をしながら気絶しているのか不思議に思つたが、そこは難なくスルーしてくれた。

……まあ、リューグさんとノエルさん、ティーダさんは何となく察したようだが。

大

父さんが目覚めたのは、皆が帰ってきてから、一時間後だった。

俺たちは、ちよつと早めの夕飯を取ることになった。

夕飯にはハイキング形式であり、好きなだけ食べれるのだ。

野菜や魚などで作られた料理をズラリと並べられているので、とても美味しそうだ。

料理を取り終えた、俺たちはテーブルの元へやつてきた。

相變わらず、母さんは食へるな

僕の母さんが少し勝負たよね

す「」な「」

「アガル」
「アガル」

「い、いいじゃない！ だつて美味しそうなんだもん！ 食べたいんだもん！」

「あははは、リンク、レンンくん、ティーダくん、あまり苛めない
であげて」

ティアナは純粋に驚き、俺たちは母さんの持ってきた料理の数に、呆れたようにため息をついた。お皿はもう置く場所もなく、しかもプレートの上には三枚の皿が乗っかっておりながら、プレートを

一枚まとめて使つなんて、どんだけの食欲があるんだ、幽さん。

「あー、エクレール。どうしたの？ ずいぶんと少ないじゃない」

「いや、その…………」

「実はね、お姉ちゃん、最近体重増えちやつた」とを氣にしちやつてこるから

「セラッジー！」

「見た目はあまり変わつていないから、大丈夫だよ、エクレール」

「それでも、気にしちやつんだ！ 男にはわからない気持ちなんだ、これは！」

「同じ女だから、分かるわ……。リューグー、エクレールに謝りなさい！」

「謝りなさい！」

「ええっ！？ 慰めただけなのに！？」

「うちはじつちで、リューグさんが面倒なことになつてしまふし……。

まあ、なんとも騒がしい夕食になつてしまつたが、それでも楽しいとしか感じられなかつた。

第15話～旅行編？（後書き）

ちなみに、部屋の設定なのですが、みんなと一緒に寝泊りしています。リリカルなのはの温泉旅館と一緒にだと考えてくればありがたいです。

第1-6話～旅行編？（前書き）

今回は展開が速く、短いです。ご了承ください。

第16話 旅行編？

来て……

……誰だ？

私のもとに来て

あんたは一体、誰だ？

お願い……ここに来て、誰か……

いや、だから……

【扉】に来て……

【扉】？

リンク side

……変な夢だつたな。

一体なんだつたんだ、あの夢は。

俺は頭を搔きながら、周りを見渡すと、全員はまだ眠っていた。

もう一度寝ようかと考えたけれども、いつもあの夢が気になつて、眠れない。

【扉】ねえ……。

「あの森林公園にあつた、扉の一件事か？」

昨日もあそこへさつたきの声が聞こえたわけだし、他の場所にそんな【扉】なんて見たこともないしな。夢なんだから放つておこうと思つてはいるんだが、どうも気になつてしまつがない。

俺はそこに行くことを決心し、パジャマを脱ぎ、ゴムパンツにTシャツを着て、階を起しきなによつて部屋から出した。

* * * * *

遺跡の扉にやつてきたが、やつぱり昨日と同じ光景だつた。

開いた形跡もなければ、開く気配もない。

帰らうかと思ったのだが、ここまで来たんだから、なんか言つてから帰らう。

「おーい、呼ばれたんで、来てやつたぞー」

え？

……え？ いま、なんか聞こえた…………よな？

俺の気のせいなのか？

「お、おーい、あなたは夢のなかで、俺を呼ばなかつた？」

わたしの声が聞こえるのですか！？

「ぬおつー？ び、びっくりしたあー。」

いきなり、大きな声で、しかも聞い詰めるかのように聞いてくるので、思わず上半身をそつてしまつた。

あつ、「めんなさい、つい……

「いや、別にいいよ。それより、あなたのか、ここに来て欲しいって言つたの」

はい。 今から、ドアを開けます

扉が一瞬だけ光ると同時に、物々しい音を立てながら、ゆっくりと観音開きで開いていった。

ああ、どうぞ

「…………

今ならまだ引き返せる、ここに入つたら、厄介な運命に巻き込まれるかもしれないぞ？ それでもいいのか？ お前は普通の人生を過ごせばいいじゃないか。

自分にそう問い合わせる、ここでどうするかによって俺の人生が決まるかもしれない……。

普通だつたら行かずにつさと帰るかもしれないけれど
ここで帰つたら後悔する、俺はなぜかそう思った。

俺はゆっくりと歩き出し、その扉のなかへ入つていった。
それと同時に、扉はゆっくりとひとりでに閉まつた。

第17話～旅行編？（前書き）

展開早いと思われますが、よろしくお願ひいたします。

リンク side

そこは、一種の自然の世界だった。

俺が歩く先には季節ごとにしか咲くことのない花が咲いており、周りには成長しきっている木々たち、そのなかには大樹もあった。そして、そこには兔や鹿などの野生動物たちの姿もあった。

この光景は、夢のなかで見たことがある。でも、ひとつだけ何かが足りないのがある、それは一本の剣……。もしかしたら、この奥にあるのか？

はい、わたしはこの奥にいます

「つーび、びっくりしたあ！」

いきなり声を掛けられたからではなく、その女性は俺の心を読んだから、驚いたのだ。

まあ、とつあえず、まっすぐ進めば、剣があるわけで、その女性もいるってことだ。

俺は草を踏み、花を潰さないように足元を気をつけながら、まっすぐ進み始めた。

歩き始めてから数分ぐらいい経つと、どうやら風に作られたかわから

ないが、木によつて作られた橋が見えてきた。

「「」」を通ればいいのか……」

俺はゆつくりとその橋の上を歩いていった。

* * * * *

? ? ? s.i.d.e

わたしは今でも驚きを隠せない。

この80年、誰もわたしの声を聞いてくれるものなどいなかつたのに、この日ついにわたしの声を聞けた人間がいるのだから……。

恐らく声の高さにして、まだ幼き少年……驚くなといわれても無理です。

いま、彼はゆつくりとわたしの元に近づいてくるのが分かる。

それと同時に、昔、『彼』もこいつらわたしの元に来たこと、元、懐かしさを感じる。

そして、ついに、その少年がから現れ……え？

なんで？ どうして？ なぜ、あなたが『彼』そつくりなんですか？

違つと分かっていても、わたしは少年に『彼』の名前で紡ぎ呼んだ。

ルーン……

* * * * *

リンク side

ルーン？ なんのことだ？ 誰かの名前なのか？

……当たり前、ですよね。もう、^{じき}永い時間が過ぎたんですから

「ん？ 永い時間？」

つまり、この女性はもう随分と長く生きてきたことがありますか

「おーい、どこにいるのー？」

今まで、俺に声を掛けていた女性の姿がない……つたぐ、呼び出した本人がいないってどういうことなんだよ。

待つてください、今出ますから

？ 今出ますから？ どういう意味だ？

すると、剣から白い影が生まれた、その白い影はゆっくりと人の形を創つていき、それは白いドレスを着た銀髪の女性の形へと変わった。

その女性は恐らく十人中十人は必ず振り向くだらう、無駄な贅肉は

何もない美しい女性であった。

『わたしの名はエクセリアス……あなたを呼んだ者です』

「……あんたは、剣、なんだよな」

『はい、わたしは』の剣自身です』

女性 エクセリアスは台座に突き刺さっている剣を指を指しながらさう言つ。

……信じられないと言いたい、しかし先ほどの光景を見てしまったので、信じるしかないのだ。

しかし、ひとつ疑問がある。

「だけど、なんで俺なんかを呼んだんだよ、他の人を呼べば良いじゃないか」

なんで俺みたいな子供を呼んだってことだ。 別に俺じゃなくたつて、大人 例えば管理局員、鍛えられた戦士とか を呼べばいいのではないかという疑問。

それをストレートにぶつけたと、女性の顔が暗くなつた。

『……わたしは、』の80年間、ずっと呼びかけました。 誰かに、わたしのもとに来てくれるよ』

「…………」

『ですが、誰も来てくれなかつた。誰もわたしの声に反応してくれなかつた！もう駄目なんじやないかと、思つていましたがついに……』

「俺が来たつてことか……あれ？」

この言い方をすると、あの夢を見せているのは、エクセリアスの仕業じやなかつたのか……。

「来たのはいいけど、俺に何をしらつて言つんだ？」

『……わたしを抜いて欲しいのです』

……それだけ？

それだつたら簡単じやないか。？俺は台座に近寄り、剣の柄に手を添える。

柄を掴み、力を籠めて、上に引っ張りあげる！

剣はゆっくりと台座から離れていき、ついにその刀身が現された！
その刀身は両刃で純銀に、そして鏡のように美しく輝く、一種の芸術品のようなものであった。

剣 エクセリアスを天に掲げると同時に、急激な光が俺を包み込む。

あまりの眩しさで思わず目をくらますと、意識を失つてしまつた。

第18話～旅行編（終）（前書き）

旅行編強制終了です。

まだ、アインハルト出ないかもしませんので、楽しみにしている方、申し訳ございません。

第18話 旅行編（終）

漆黒の雲に覆われし空、地面は草木も生えていない乾いた荒地、そのまままるで無の世界のように感じられる。

しかし、そんな世界に、一人の若者　　雲のせいか、顔が見えない
が立っていた。

だが、そこにいたのは彼だけではなかった。

若者とは数メートルは離れている、邪悪な気配を漂わせる体格の良い一人の男　　こちらも顔が見えない　が立っていた。

若者はその男を一瞥すると同時に、一振りの剣を具現し、上半身を覆う鎧を身に着け、男に突っ込んで行った。

男はペンドントを、剣に変え、若者の刃とぶつかり合つた。

* * * * *

リンクside

「……………「あ」

なんなんだ、たつきの。　夢……なのか？　なんで、あんな夢を。

とこつが、「」？　顔だけを動かし、周りを見渡すと、どうやら病院のよう。

身体を動かすとも、身体中のダルさのせいで、動くことができない

かつた。

どうしようかと考えていると、ガチャリとドアが開いた音が聞こえ、顔を動かして見ると、そこには母さんが呆然と立っていた。

そして、「リンクつ！」と悲鳴を上げたかのように声を荒げながら、「ひかりにやつってきた。

「大丈夫つ！？ 身体は痛んでない！？ わたしのこと分かる！？」

「ちよつ、ストップストップ！ 落ち着いて！」

母さんの鬼気迫る表情に、思わず引いてしまったが、両手で落ち着かせるジースチャーをしたのだが、どうも落ち着かない。

いつたい何なんだよ、この鬼気迫る理由は。

「どうしたんだよ、母さん、落ち着けつて」

「落ち着けないわよ！ あんた、あんた、いつたい何日間寝てたと思つの！？」

「……？ 何日間？」

母さんの言葉に、俺の頭のなかに、疑問ばかりが浮かんだ。

* * * * *

三階の病室のためか、もしくはこの部屋がいい場所なのかは知らないが、綺麗な夕焼けがよく見える。

あのあと、数分後にナースとお医者さんがやってきて、母さんと一緒に、事情を教えてくれた。

旅行【田田】、【扉】の前に気絶している俺を、母たちが見つけ、すぐさま病院に連れて行つた。

身体の外傷は見つからなかつたが、意識不明になつていたらしく、皆が皆不安でしうがなかつたらしい。あと、一日の旅行日なんて知つたこっちゃないといわんばかりに、すぐ『ミジドナルダ』に帰り、病院へと入院。

それから2週間もの間、俺はずつと意識不明でずつと眠つていたらしい。

まあ、そんなことは置いといて 置いとこっちゃいけないが。

それよりも、もう8月なのか…………実感湧かないな。いや、それはどうでもいいが。

問題は、エクセリアスだ。あいつは、いったいどこにいるんだ？
ここおりますが？

「ぬえい！？」

思わず変な声を上げながら、俺は慌てながら、周りを見渡した。

なに、ビート正在进行の、エクセリアス！？

……貴方様の中にいます

おいこいら、若干呆れただろう、お前。 しおうがないじゃん、だつて生前の俺は魔法の世界なんかじゃない、現実リアルの世界で生きてたんだからよ。 というか、人の心を読むなよ、人権被害で訴えてやるぞ。

「って、俺の中？ もしかして、俺の身体の中に剣が？」

そのとおりです、剣は貴方の中に収められています。 貴方の一部へとなつたのです

……それって、まさかロストロギアには入らないよね？ 後で、ちよいとアルスさんたちに調べてもうおつかな？

「とりあえず、それ出せんっ！」

はい、出せます。 右手に剣わたしをイメージしてみてください

すっと瞼を閉じて、右手にエクセリアスが出るというイメージと念を込めるど、なにかが手に乗っかつたと同時に、軽い脱力感が俺に襲つた。

多分だが、エクセリアスを召喚したことによつて、魔力が減つたのだろう。

ちなみに、俺の魔力値はこぐらい。

瞼を開くと、手にはエクセリアスの姿があった。

「…………すっぴ」

まったく重さも感じられないし、めりやめりや軽い……まるで羽を持っているような感じだった。

しかし、まだ入院中の身、無茶をしてしまったので、すぐさまエクセリアスは消えてしまった。

「うう…………と疲れた」

『めんなれこ、無茶をやせてしまつて

「いや、気にすんな。 出したいといつ欲に負けてしまつた俺が悪いんだからな」

くわあっとあくびを出した後、徐々に眠気が俺に襲い掛かった。

ウツウツとしてこそ、俺はゆっくりと瞼を開かし、眠り陥った。

リンク side

俺が退院し、さらには夏休みが終わってから、あれから2ヶ月半は経ちました。

暑かつた季節も終わり、涼しい毎日を過ごしています。

もちろん、それはエクセリアスもそうです。

ただ、この世界での、エクセリアスの動搖が凄かつたな。

その一部をご紹しよう……。

マスター、マスター！ 箱のなかに、人が入ってあります！
コレは一体何なのでですか！？

マスター！ 鎧を装着した鳥みたいなのが飛んでいます！ あれは一体なんなんですか！？

マスター、なにか変なもの人を乗せて走っています！ あれは

なんですか！？

マスター！ なんですか、このへんちくりんなものは！？ どこから水を出しているのですか！？ というか、こんなので、服を洗えるのですか！？ etc . etc . etc

……うん、めっちゃ疲れたね。 あの勢いは凄かったとしか言えなかつたな、うむ。

それと、アルスさんとレジアスさんに、エクセリアスというロストロギアがあるのかを聞いてみた。

調べてもうつた結果、存在しないこと。

それはぶつちやけありがたいとしか言いようがなかつたな。 だつて、ロストロギアを持つていると、管理局に入らなければならぬとか言つのを聞いたことあるし。

俺は管理局なんかに就職せずに、普通の職業に就職したいからな……喫茶店の店員か、母さんみたいな格闘術 ストライクアーツといわれている を教える教官とか。 あつ、因みに、俺は剣術だけじやなくて、ストライクアーツも学んでいる。

ああ、そうだ、一言言つておこうかな。

母さんのお腹の中に、新しい生命が宿りました。？

多分、旅行で「テキたんだ」と思います。

周りはもちろんおめでとうと祝ってくれたのだが、両親はなんか微妙な雰囲気を漂わせていました。

まあ、当然だな。

因みに、俺が寝ようとしたときに、トイレに行って、部屋に帰ろうとしたときに、偶然聞いた会話がある。

それをちょっと再生してみよう。

* * * * *

「……ま、まさか、あの時で「テキたなんてね」

「~~~~つ！ もう！ バカッ！」

「い、いいじゃないか。 それに、リンクも1人だから、可哀想じやないか」

「そ、それはそなんだけど……。 だって、リンク、知ってるんだよ、あの旅行で、わたしたちがその、したこと」

「ふつ……そ、それって本当…？」

「「ひゅ~、じゅじゅ~」

* * * * *

はい、じじめで。

後の会話は聞かないであげよう、と、早田に退散いたしましたので、その後の会話は知らない。

そして、明日は休みとこいつは フロイトから電話が来た。

* * * * ?

『~~~~』

着信音が響き、パジャマのズボンを着替えると、すぐさま携帯を手に取り、ボタンを押す。

『あ、あの、リンクさん、ですか？』

「はいはい、そうですねー」

『ああ、よかつた』

フロイトの安堵の息を吐くのが聞こえる。？

ちゃんと、電話が繋がるか心配だつたんだな……。

『あ、あのね、明日つて遊べるかな?』

「ん? 別に構わんけど、俺の親友らも誘つていいか? お前のことも紹介したいし」

『うん。 もちろん』?

「それじゃあ、お皿を食べ終えたあと、最初にお前と会合つた、あの公園で会おう」

『うん、また明日、バイバイ』

「バイバイ

ブツンと電話を切つて、俺はベッドに横になり、瞼を瞑り、すぐに眠つた。

* * * * *

フロイトside

「はあ……」

受話器を置いて、私は一息ついた。

男の子を誘つのこりんなに緊張するなんて思わなかつた、まだ胸が

デキデキしてこらもん。

明日はリンクで余つてだけなのに、なんだか嬉しくなつてきました。

遅刻しないように お風のあとで余つから、しないこと思つばかり
早めに寝ないと。

私はベッドの上で横になつて、あつべつと畠を興つた。

第20話～フロイドのお出かけ？（前編）

「AINHOLDTも出でない上に、長つたらしく書いていてすこません……。」

一応予定では、1Jのお出かけシリーズを終えたら、展開を進めようつかなと思つておつまむのだが、お付を合ごお願ひします。

第20話～フェイトとお出かけ？

リンク side

「ねえねえ、リンク、その女の子ってまだなの？」

「うーん、もう少しのはずなんだが……」

フェイトと始めて出会った公園で、俺たちは彼女を持つていた。かれこれ、五分は経っている。まだ五分だけビ、ここにひとつては長く感じるのか、俺に聞いてくる。

俺は別にせつは感じられないんだが……年の功か？

「ちゃんと、この時間であつているのかい、リンク？」

「レノン。俺はちゃんと彼女にお昼を食べ終えた後つて言つたんだから、大丈夫だつて」

「…………お昼を食べ終えた後つて、それじゃあ、約束の時間とか言つていられないじゃない」

「あ

セツの言葉に、俺は思わずペシツと固まつた。

しまつた……俺としたことが時間のことを言つていなかつた！

「いやー、参ったね、」

「いやー、参ったね、」

ペチンと頭をたたいて、おどけるが。

「「…………」」

マスター、あなたはなにをやつているのですか……

二人の呆れた目が俺を貫き、ため息混じりに俺を攻めるエクセリアス。

うわあ、四面楚歌、俺の周り敵ばっかじやん。しかし、悪いのは俺なんだよな、謝るか。

俺は一人と、胸のなかにいる一人に、謝るひつとしたとき、

「リ、リンク！ 遅れちゃって、『めんね！』

声が聞こえたので、俺は背後を振り向くと、そこには黒いワンドピースを着たフェイトがいた。

「いや、遅れてなんかいないよ。むしろ、俺たちはつっこつき来たからな

「よ、よかつた。それと、あの、そこにいる人たちって

「おお、覚えているか。そうだよ、俺がティーダさんに拷問されているつてのに、助けてくれなかつた薄情な幼馴染一人」

「いや、あの時は確實にリンクが悪かつたからね？」「私、まだ

怒ってるからね

……レノン、後でシバク。 なんだよい加減許してくれたっていいじやないか、サラ。

「まあいいや、お前ら血口紹介しろ

「はいはい。 僕は、レノン・ナカジマだよ。 リンクの幼馴染だよ、よろしく

レノンは律儀に腰を折って挨拶。

礼儀正しいな、やつぱりゲンヤさんとクイントさんの息子だからか？ いや、俺と比べると低いが、精神年齢がちょっと高いからか？

まあ、そんなことどうでもいいか。

「私はセラ・ファロンって書つの。 私もリンクの幼馴染なんだ、よろしくね

「うん、一人とも、よろしくね

「ほい、そんじゃ、フェイト。 お前も血口紹介しろ

フェイトが軽く咳をして、喉の調子を整える。

「私はフェイト・テスター・サラ……です。 よければ、私と、友達になつてください

「はあ……

フロイトの言葉で、俺は軽いため息を吐いて、フロイトに近づこう。

「君さんのドラマホ

「ふみやーー。」

思いつめつてパンパン。しかし、画面に悲鳴を上げるなしの子。

「こ、いたい……」

「なにが、『友達になつてください』だ。もう、自己紹介した時点で、友達になつたんだからよ」

なことを言つてこゐるんだもん、君の君ませ。

俺がそつまつと、セリヒンもソンも軽く笑いながら、フロイトに近づく。

「わつだよ、名前を呼び合つたんだから、もつ友達だよ」

「やうのまつひとおつ。もしかして、まだ友達になつていなかな?

「……わん……もつ、私たち友達だよー。」

レノンの言葉に、必死に言葉を紡ぐフロイトで、俺たちは思わず笑みをこぼしてしまつ。

「う、ううーーー

しかし、笑みをこじめず俺たち、「フロイトは変な声を出して、睨みつける。

「へへへ、わひと、それじゃあ行こうか。俺たちのお勧めスポーツを紹介してやるぜ」

と書つても、商店街内にあるやつらがな……。

しかし、なかにはお勧めのスポーツがあるのは事実だけだ。

「それじゃあ、行こうよ、フロイトちゃん」

セリフは二つと邪氣のない笑みを浮かべて、フロイトと手をつなごだ。

「あー、うん。 むろじへね、監

その言葉に、俺たちは微笑みながら頷いた。

第21話 フェイトとお出かけ？

リンク side

商店街にある、手作り装飾品店 以前、クイントさんのプレゼントを買った場所 に俺たちはいた。

「うーん、フェイトちゃん、これは似合わないな～」

「そうかな？ でも、わたしはこれがいいかな……」

「ダメダメ！ フェイトちゃんは女の子なんだから、いつこのままダメなのー！」

「あ、う、うん……」

セラの勢いに思わずフェイトは腰が弾いている……。

まあ、セラ言い分は確かだな。 フェイトも女の子なんだ、そんな黒いフレスレットはあんまり似合わないし、付けない方がいいと俺も思つ。

「セラ…… そんな鬼のような顔をしきゃダメだよ。 フェイトさん が怯えているじゃないか」

「鬼のような顔つて何！？ それだったら、レノンなんか……レノンなんか……ええーと」

「「思いつかないのかよ」」

言ことばりよむカラヒ、俺たちは思わず突つ込んでしまった。

その光景に、フェイトは笑つた。

「ううー!? フェイトちゃん、笑わないでよー」

「クスクス、だつて……」

「フェイトも呆れちゃつたんだな、セラに」

「なー!? リンク、酷い!」

セラは「ううー」と上田遣いで睨んでくるが、全然怖くないので、
品物を物色。

ふむ、前にも来たことはあるが、やつぱり色々とあるんだな……。

フェイトに似合ひやうな装飾品はあるかな……。

そう考えて、目にチラッと入ったのが、金属細工で作られた金色の
薔薇で彩られているブレスレットだった。

これ、フェイトに似合ひやないかと思い、そのブレスレットを
手に取り、眼前まで持つてくる。

値段は……1000円か、ちょっと高いな。

だけど、フロイトにちよこと聞いてみるか。

「なあ、フロイト、これなんてどうだ？」

「え……」のブレスレット。」

「ああ、気にこいつてくれたなら、買ひづぜ。フロイトに似合ひそつなんださど、一応聞いておこうと思つてな」

フロイトはそのブレスレットを手に取り、右腕に付けた。

そして、セラヒレーンのブレスレットを付けた姿を見せると、

「うふうふー、フロイトちやん、似合つー！」

「うふ、本当に似合つよ」

「あ、ありがとうございます。一人とも。リンク、買つてくれるかな？」

フロイトはさうか申し訳なわせつて、ブレスレットをおずおずと俺に突き出してくる。

その姿に思わず苦笑しながら、頭を撫でる。

「もちろん。友達の最初のお願いを断ることなんてできないからな

俺は財布を開いてレジのほうへ向かう、」のブレスレットを買つた
めに……。

あらがとつと書つて、コンクはレジのまへへ歩いていた。

「まこはー、やが

「やがとつと書つて、まこはーから、あらとつと

「あー、まこはー、きみまつまつまつまつまつまつ奴だったね、すっかり

忘れてたよ、僕は

「だつて、しうがなーじやん。 ないもんはないんだから

「なんなんだよ、あらとつと書つて、まこはー?

リンクの一言に思わずガクッとした。なつちやつた。

だって、あらとつと書つて、あんなカツコイイ」と書つたのに、いきなりあんなことを書つて出したやうなんだもん……。

「あー、せべ、細かいのなー。 レノン、50円貸して」
* * * * *

フライテッド

「あはは、やつらのがなかつたら、かつしよかつたのにね、フュイ
トウちゃん」

「やつだね……」

でも、やつも、頭を撫でてくれたのが、凄く嬉しかったな……。

リンクが撫でてくれた頭を、私はそつと手で押さえる。？

「？ どうしたの、フュイトウちゃん？」

「！ う、ううん、なんでもないよー。リンクが撫でてくれたのが
嬉しいだなんて思ってないよー？」

「……ふ~ん」

はうー？ し、しまつたあ……。

ジト目で見るセラに、私はできるだけ、セラと目線を合わせず、
辺りを見渡す。

うう、なんで、セラはそんな目で私を見るの……。

* * * * *

セラ side

フュイトウちゃんが……ええと自爆（？本人は自白と言ったかつ
たが、これしか思いつかなかつた）？して、わたしが思ったのは
一つ。

この子は、私の敵だということが分かった。

でもでも、たったそれだけで、フェイトちゃんとは喧嘩しないよ。

だって、そんなことしても、悲しいだけだもん。でも、リンクは分け合いつこしたいなあ……。

第22話～フロイトとお出かけ？（前書き）

まさかのあの三人組が出てきます。……出す予定はなかつたんですけど、なんかこっちのほうがいいかもと思って、出しちゃいました。

第22話 フェイトとお出かけ？

リンク side

装飾品店を出て、次に俺たちが向かったのは商店街から離れた、街の一角にある駄菓子屋にやつてきた。

この近未来街 前世の記憶を持つている俺にとつては近未来街に駄菓子屋なんてあるわけがないと思っていたのだが、一年前、アルスさんにこの駄菓子屋に連れられたのだ。

それなりの年月が経っているため、汚れがついていたり、壁の一部が若干欠けたりしている、駄菓子屋『チャーブルド』。

その駄菓子屋の周りには、子供たちが集まっていて、駄菓子やら小さいカツップめんを食べていた。

「……変な名前だね」

「まあ、そう言いたくなるよね」

フェイトの一言で、レノンと俺は思わず苦笑いをしてしまう。

俺たちもこの駄菓子屋に来たときはそう言ひちやつたし。

「早く入らうよ。お菓子を買おう。」

セラがわらわらと田を輝かせながら言つので、俺たち 遂にフェ

イトまでもが 苦笑してしまう。

「れじゃあ、どひらが案内をしてるのか分からないな、まったく。

俺たちは、『チャーブルド』の店内に入った。

「うわあ……」

フロイトは店内にある沢山の駄菓子をまるで宝物のようにはしゃいで見る。

ふふつ、ぢりぢり、フロイトさんは世間知り屋のよつですね

（ははり、一ヶ月前に来たときのお前も、フロイトと回り歩いて話を上げてたぞ）

はう……

（だけど、エクセリアスは仕方ないか、ずっとあそこにいたんだからな……）

「そ、そうですね！ 私は80年もあそこにいたのですから、分からなくて当然なのです！」

（必死に言つなよ、まったく……）

エクセリアスに呆れながらも苦笑してしまう。

「？ ビウしたの、リンク

「いや、なんでもないよ。 フロイト、JJJの駄菓子屋は人気だぞ」

「えりなの？」

「子供たちのお小遣いでも結構買えるし、おいしいからね、JJJの駄菓子屋は人気だぞ」

駄菓子

「えりえりー 私とリンクとレノン、たまにだけど、学校の帰りに、寄つているんだ！ ね、リンク？」

セラの言葉に頷くと、店の奥にいた、白髪の60代のおじいさんが出てきた。

「おり、仲良し三人組、元気かい？」

「ああ、元気だよ、おじいさん。 腰痛はびつ？」

「相変わらず、リンクは難しい言葉知ってるの。 ん？ その可愛い子は？」

おじいさんはフロイトに気づき、指差す。 おい、おじいさんよ、人に指差すなよ、失礼だろ？

「ああ、新しい友達の、フロイトっていうんだ」

「ほひ、フロイトちゃんか。 そうかそうか、まあ、よろしくなあ」

「ほひ」という擬音が着きそうな笑顔を浮かべるおじいさんに、フロイトも返すように微笑んだ。

「ちなみに、おじさん、フュイトは始めて来たからさ、安く売つてあげてよ」

「駄菓子屋なんで、そんな高いお菓子は売つてはいないと思つが、一応言つておひづ、うん。

「かまわんよ。やんじゃあ、初のお客さんであるフュイトちゃんは3つ、ただでやうづ。だが、仲良し三人組は、金払えよ」

「「ええー」」

「はーー」

レノンとセラは不満の声を上げるが、俺は苦笑しながら、それに了承した。

二人は渋々と駄菓子を見ていくなかで、俺は自分の好きなお菓子を買おうとすると、フュイトが声を掛けてきた。

「リンク……」

「ん? なに、フュイト?」

「私、こういうの初めてだから、なにを買つたらいいのか、分かんなくつて……どれがお勧めなのか教えてくれる?」

「うーん、俺も、どの駄菓子がお勧めなのか分からなからな……」

そこまで、俺たちは駄菓子に興味を持つてゐるわけじゃない。た

だ安くお菓子が買えるので、買おうとこうレベルなので。 どんなお菓子がお勧めなのか分からないんだよな……。

「フュイトが欲しいと思ったのを買えばいいと想つよ?」

「私の……?」

「そう、お勧めのお菓子を買つんじゃなくて、フュイトが、自分が欲しいものを普通に買つていけばいいんじゃない?」

俺の言葉に、フュイトは笑顔で「うん」と頷いて、駄菓子を見出して行つた。

さてと、俺はいつものチョコレートバットとカーパンにラムネでも買おつかな……。

* * * * *

駄菓子を買え終えた俺たちは、ベンチに座つて、買った駄菓子を食べていた。

レノンは、チョコレートバットに野菜棒、チューチューアイス。

セツは、キャラメルにチャーチャパン、飲むヨーグルト。

フュイトは、麦チョコにヤングドーナツ、ミルク。

「リンクはいつも同じの買つてるね、違うのを買えばいいのこ

「君には、飽きるって言葉はないのかい？」

「いいじゃないか、これがおいしいんだから」

「せうなんだ。じゃあ、今度、それ買ってみようかな」

それそれ買ったお菓子を食べながら談笑していくと、

「相変わらずだな、そこの三人組」

と声を掛けたのは、ひとつ年上の生意気真っ盛りの少年……サイファー・アルマシーであった。

その隣にいるのは、同じくひとつ年上の少女、風神。そして、筋肉が結構ついている少年、雷神の姿もあった。

「いや、相変わらずなのは君たちもだらつ」

「うるせーだもんよー！」

雷神はレノンに言われたのが、気に食わなかつたのか、怒りながらそう言つた。

……身体は大きくて、精神年齢はレノンのほうが高いかもな。

「あ？ なんだ、その女は」

サイファーがフェイトに気づき、俺に聞いてくる。

「『』の子は俺たちの新しい友達だ。 それと、俺たちに何の用だ?」

サイファーが、ただ俺たちに声をかけるだけっていつのは、絶対にあり得ない。 きっと、なにか面倒なことを、ふっかけてきたのだろう。

「……復讐」

『はあ?』

風神の一言に、俺たちは思わず呆けた声を出した。

復讐? ? どういう意味だ?

俺たちのわけ分からぬといつた顔に、サイファーが馬鹿にしたように「ふんっ」と鼻で笑つた どういう意味なのかが分からぬ俺たちを馬鹿にするよ!。

レノンとセラにフェイトは、それが不快だったのか、顔が険しくなつた。

サイファーはそんな三人を無視し、俺に言った。

「リンク、俺と、もう一度ストライクアーツで勝負しろ」

第22話～フロイトとお出かけ？（後書き）

サイファーの口調つてあれでよかつたんでしたつけ？

雷神は簡単でいいけど、風神の口調が難しい……。

第23話～フロイトのお出かけ？（前書き）

どうも、諸事情で、更新が遅くなってしまい、申し訳ござりませんでした。

リンク～サイファー……なんですが、ぶっちゃけ、すぐに終わります～

いい加減に、アインハルト出さねばなりませんし……。

第23話 フェイトとお出かけ？

区民センター内スポーツコート、ここにスタッフに借りた防具を身に着けるリンクとサイファーの姿があった。

レノン、セラ、フェイト、雷神、風神は一人から離れているところを見ていた。

「前は手加減してやつただけだ、今度はマジで行くぞ」

「それじゃあ、お互いに本気でやらないとな」

サイファーとリンクは両腕を身体の前に構える。

「手加減なんぞ、すんなよ」

「そつちこや」

一人は、軽く言葉を混じ合わせ終えたと同時に、互いの拳をぶつけ合わせた。

拳をぶつけ合つたあと、一旦離れ、再び突つ込んだ。

互いの腕をぶつけ合わせた後、サイファーの拳がリンクの頬を狙う。

その攻撃を、リンクは右手首に付けてある防具で受け、サイファーに中段蹴りを放つ。

しかし、蹴りがサイファーの腹に入る前に、サイファーはバックス

テップで避けた。

「はつ、まだまだだな」

「ははは、わうわ！」

嘲るような笑みを浮かべるサイファーに対し、リンクはただただ楽しそうな笑みを浮かべていた。

「それじゃ……行くぞー！」

「はつ、来い！」

再び、二人は拳と拳をぶつけ合わせた。

* * * * *

フェイト side

「やるもんよー！ サイファー！ リンクを倒すだもんよー！」

「うるさいよ、雷神。 少しは静かにしなよ」

「んなつー？ 僕を呼び捨てにするなだもんよー。 お前は少しは年上を敬うんだもんよー！」

「君以外の全員の大人には敬つてゐよ」

「むがああああああああああああああああああああー」

レノンと雷神さんの口争いなんて気にしないで、私はリンクをずっと

と見ていた。

リンクとサイファーセンとの戦いに興奮を覚えちやうけだ、リンクが怪我をした「うん」とこの不安があった。

私は、できるだけリンクが怪我しないように、祈るように手を組んだ。

「大丈夫だよ」

セラが私の手を優しく握った。セラの表情には不安なんてなく、笑顔で私を見ていた。

「……不安じゃないの、リンクの」と

私の言葉に、セラは首を横に振る。

「だつて、リンクは強いもん、だから心配する必要ないよ。」

優しくも力強い声で、私を励ましてくれるセラ。

壁の片隅で沈んでいる雷神さんの様子を見ると、口争いに勝つたレノンが微笑みながら頷いた。

それだけで、私はこの二人が、どれだけリンクを信じているのかが分かった。

「だから、フロイトちゃんも、リンクを信じよう、ね？」

私が「うん」と言おうとしたとき、ドタンと倒れた音が聞こえた。

音が聞こえたぼうに振り向くと、サイフナーさんが倒れていて、リンクはパンパンと手をはたいていた。

リンクが勝った！

私とセラは「やったあー！」とお互いの手を叩きあい、レノンは「よつしゃ」と書いて、ガッツポーズをした。

雷神さんと風神さんは『サイフナー！』と書いて、倒れたサイフナーさんの元に向かった

* * * * *

リンク side

「はい、俺の勝ち

「ぐくそ……つ、これで、勝った、と、思ひ、なよ

悪態つくほどの元氣があるみたいなので、別に心配する必要はないな。

「サ、サイフナーは補修の疲れで負けたんだもんよー。」

「仕方がない！」

負けたサイフナーを庇つて、フォローする一人に、俺は「はいはい」と軽く流して、防具を外したあと、俺はフェイトたちのぼうに駆け寄つた。

「お」かつたよ、リンクッ」

フェイトはどこか興奮気味にそう言つてきた。

もしかしたら、フェイトはストライク・アーツを見たのは初めてかもしれないな。

ふむ、今度、フェイトを連れて、ストライク・アーツの練習試合を見せてあげようかな。

「それじゃあ、早く次のスポットに行こうよ。フェイトちゃんに紹介したい場所、まだあるんだもん」

俺たちはセラの言葉に頷いて、歩き出していく。

第23話～フロイトのお出かけ？（後書き）

……風神ってあんな口調でよかつたんでしたっけ？

最近、原作の風神のことが、薄れしていくから、不安になつていいく……。

第24話～フロイトのお出かけ（終）（前書き）

なんだか、終わりが中途半端です……。

終わりが中途半端ってことは、自分はまだまだつてことですね……。

第24話～フェイトとお出かけ（終）

リンク side

あれから、俺たちは様々な場所 ゲームセンター、パン屋、喫茶店、玩具屋等々を巡った。

どの店でも、フェイトは楽しげな笑みを浮かべてくれていたので、俺は『よかつた』と感じた。

しかし、楽しい時間も長くは続かない。 終わりの時は、必ず迎えるのだ。

夕焼けが街を染まっている時間帯に、俺たちはまた公園にいた。

「……もうこんな時間帯なんだね」

「時間は経つのが早いからね……」

まだ遊び足りないといわんばかりの表情を浮かべているレオンヒラ。

それでも時間は時間、俺たちのような子供は帰らなければならぬ。

「フェイト、もういいから帰らなきゃ」

「……………ひん

ゲームセンターで取った景品 熊のぬいぐるみと、とあるゲームに出ているピンク色の丸い生命体を抱きしめながら、フォイトは悲しそうに元気くへりと頷いた。

そんなフォイト、「俺はペチんと弱く頭を叩いた。

「ふやー。」

そして、思いつきり、頭をグリグリと力強く撫でた。 力強く撫でているので、微妙に痛いだろ？……。

「あい、あたたつ

「リ、リンク、ちょっとやさしきじやないかい？」

何を言つたか、レノン。「これはまだ序の口だぞ？」

「リンク、フォイトちゃんが痛がつていいから、やめてあげなよ。」

マスター、止めてあげてください

セラとエクセリアスは、同じ女の子であるフォイトに暴力 とまではいかないが、フォイトが痛がつていいので、セラの手にはやう見えているのだろうが を振るつていい俺を非難。

さすがに、非難されると、心が痛むので、俺はゆっくりと放す。

フォイトは痛む頭をスリスリと撫でながら、涙目で俺を睨む

ご

めん、ぜんぜん怖くない。

「ひ、ひどこよ、リンク」

「うるさい、なに勝手に、寂しそうな顔になつているんだ

「う……だ、だつて……」

「俺たちだつて、お前と別れるのは辛いし寂しこよ。だからつて、これが最後つてわけじゃないだろ?」

「……でも、私、またいつ会えるか分からないよ

「フロイトちゃん、ビートが引っ越すの?」

セラの言葉に、フロイトは「……そんなところかな」と悲しそうな笑顔で俯いてしまった。

……なるほど、それで寂しそうにしていたのか。

だけど、敢えて言わせてもらおう。

「それがどうした」

「え……?」

俺の言葉に、驚いたのか、フロイトは俺を見る。

「また、会えるだろ?」

俺はフェイトに近寄り、そつと頭を撫でた。

フェイトは頭を撫でられたことが恥ずかしいのか、頬が赤くなつた。

「せうだよ、リンクの言ひとおりー！ また会えるよー。」

セラは、フェイトの手を握つて、太陽のような笑顔を、暗い雰囲気を漂わせていたフェイトに見せる。

その笑顔のおかげか、若干だけど、フェイトが漂わせていたくらい雰囲気が薄れしていく。

「や、そうだよね」

「せうだよ。もし、寂しくなつたら、メールを送るよ。それで、元気だしなよ」

レノンは優しく微笑みながら、フェイトの肩を優しく、ポンポンと叩いた。

「 うん！」

もう、フェイトには暗い雰囲気は漂わせてはいなかつた。

彼女にあるのは、かわいらしく、明るい笑顔だつた。

第25話～誕生～（前書き）

かなり進んじゃいますけど、遂にあの子が生まれます！

みなさん、待たせてしまつたすいません！

第25話～誕生～

幾時の月日が流れた。

その月日は、彼らは騒がしくも、楽しい日常が流れた。

マリカのお腹は徐々に膨れ上がり、良好している。

そして、年が明け、リンクたちもひとつ歳が上がり、自分たちの誕生日を迎れば、晴れて10歳となるだろう。

そして、ついに……彼女が生まれる。

リンクside

小雨が降っているにもかかわらず、俺は傘も差さずに必死に走っていた。

冷たい水滴が、俺に張り付いてくるが、そんなこと気にせず、走り続ける。

なぜ、俺がこんなに急いでいるかというと、今から五分前に遡る。

「ああ、くそつ。やつぱり、売られてたか、悔しいなあ……」

* * * * *

そのとおり、俺はとある小説を買つたために本屋にいた。

でも、学校を終えてそのまま行つたにもかかわらず、その小説は売り切れになつていた。

その本を歸るのを楽しみにしていたのに、とても悔しかつたとしか言こようがなかつた。

もう、このまま家に歸らうと思つて、本屋から出る。

『~~~~~』

携帯の着信音が鳴り、取り出すと、父さんからの電話だった。

なんだかと思つて、俺は携帯の電源をつける。

『コリコリコリ、コンク！？ いいい、今、ビビビビビ、ビビビビビのーー』

「？ 本屋だナゾ、それがなに？」

普段落ち着いた雰囲気を表す父さんが「」まだ流れてくるのは珍しいなと暢気に考へている。

『いいいい、今すぐ、びよ、病院へ、くるんだ！ も、おんなんあか、の、子、供が、ひひひひ、生まれやが、うなんだ！』

……………！？？？

「はあああああ……？？」

本屋の前にもかかわらず、俺は思いっきり叫んでしまった。
「ちゅう、えつ！？ 予定より、まだ一ヶ月も先じゃん！？ ピうな
つてるんだよ、おいおい！？」

マスター。 混乱する気持ちは分かりますが、今は病院に向か
いましょう

「そ、そうだな、じゃ、じゃあ、行こう！？」

* * * * *

つまりは、そういうわけだ。

予定より、一ヶ月も先にもかかわらず、生まれるところわけなので
すよ。 アアア、なんで俺はこんなときに本屋に行っちゃってたん
だ、俺の馬鹿野郎！

……………マスター、落ち着いてください

無理に決まつてんだろ？、エクセリアス！？

ああ、大丈夫かな、母さん！？

母さんなら大丈夫だといっていたのは、マスターですよ。 だ

から、落ち着いてください。 こんな雨のなか走っていたら、怪我をしてしまいます

エクセリアスに言われて、走っていた足をゆっくりとした歩みとなつた。

混乱は徐々に納まり、俺はよひよひ冷静になつていた。

ですが、マスターの氣持ちは分かります。 どうしても、心配になつてしまいますよね

不安にもなるよ、部屋の外からでも聞こえる悲鳴で、思わず竦みあがつちまつよ。

(……前世まえにも体験したけど、やっぱ慣れないよな)

いつこうときに限つて、男つてやつは情けないよな

本当にですね、情けなかつたですよ。 さつきのマスターは

さつさ今までの流れていた自分を思い出すのと同時に恥ずかしさを覚える。

ああ、畜生、否定できないのが悔しいよ。

* * * * *

病院内にて、手術室前にて、ウロウロしてゐるルークの姿があつた。

そんなルークを呆れたように見てゐるのは、今日は非番 という

よりも、アルスと結婚したときから、主婦としてやつてている　　の
ルーテシアを抱いているメガーヌと夫であるアルス。

なぜ、この一人がいるかというと、メガーヌはルークとマリカの自宅で、お茶をしていたからである。 ちなみに、アルスは部下から『働きすぎなので、休んでください』と言われて、仕事場から追い出されたので、暇だつたため、一人の自宅に寄つた。

「……ルーク、少しばらかせていたらどうだ？」

「いいいい、いや、だだつだつだつて」

「あらあら、そんなこと言つても無駄みたい」

動搖しているルークに落ち着かせようとしているのだが、それは焼け石に水であり、まつたくと言つていいほど無駄だった。

「やれやれ……情けないもんだな」

「あら。 そういうアルスだつて、私がルーテシアを産んでいると
き、普段の様子とは慌てていたつて聞いたわよ。 あと、あたりを
ウロウロしていたつてことも」

「…………おい、それをどこで聞いた。 というか、誰が言つたん
だ、そんなこと。 クイントか？」

「リンク君が教えてくれたわよ」

ヒクッヒクッと口元をゆがみ、指を『キーン』『キーン』と鳴らすアルス。

どうやら、メガーヌに教えたことに腹立つているようだが、アルスの頬が若干赤い。

恐らくだが、腹立っているのと同時に、恥ずかしさもあるのだらう。

まあ、大切な人にそんな恥ずかしいことを告げ口をされてしまえば、
そうなつてしまつだらう…………たぶん。

「あっ、メガーヌさんにアルスさん。
来てたんですか」

タイミングが良いのか悪いのかは分からぬが、リンクはやつてき
た。

「コンク、四日覚悟しれよ」

「はい？」

突然の言葉に、リンクは首を傾げるが、その意味を知ったのは後日。

まあ、
それはともかく
閑話休題として。

「リリリリ、リンクー、ママママママ、マリカがが」

「落ち着いて、父さん。ほら、深呼吸深呼吸」

ପାତା ୧୦୨

「うたぐるねん、父ちゃん。」

まったくと言つていいくほど落ち着きを見せない父親に、リンクはなぜか謝罪の言葉を述べる。

そして、何を思ったのか、ルークの腹を思いつきり殴つた。

「ぐう……おう」

ルークは一体何が起つたのかわからないまま、そのまま気絶した。まさかの光景に、メガーヌは「ええ！？」と驚いたが、アルスにしては

「つむ、腕は確実に上がっているな、リンク。これからも精進しろよ」

「ありがと、う、うま、す」

リンクを褒めていた。

第25話～誕生～（後書き）

……すいません、もづきゅうとお待ちください。

といつか、最近忙しいな。一年前までは楽だったのに、どうしてだ？

リンクside

父さんが気絶してから、3分後、父さんは目覚めた。

「あいたたた……ひどいよ、リンク」

「だからひつたじやん、『めんつて』

「ああ、なるほど。あのときの『じめん』ってそういう意味だつたの……つて！だからと黙つて、思いつめに段ることないじやないか！」

「だつて、あのときの父さんを落ちぬかせたためにはあるしかなかつたんだもん」

「いや、だからひつて……」

「騒ぐな、ここは病院だぞ」

俺たちの口争いに終止符付けたのは、アルスさんだった。

「ぶつちやけ、もしもリンクが殴らなかつたら、俺が殴つていたかも知れんぞ、ルーク」

「…………」

アルスさんの言葉に、父さんは固まり青ざめてしまった。

もし、アルスさんが父さんを殴つたら、俺よりもひどいんじゃない
か。

多分、氣絶した後も、ビクンビクンと痙攣していると思つ……。

「……リンク、止めてくれてありがとう」

……息子に殴られた父親が言つた言ひではないと想つが、とつあえず
「うそ」と返しておいた。

* * * * *

「 んぐつ、つうあ、はああー！」

手術室から、苦痛に耐えている声が聞こえる。

その声を聞くたびに、俺は いや、俺と父さんは身体を竦んでしまつ。

アルスさんはただただ冷静に腕を組んでおり、メガーヌさんは両手を胸元で組んでいた。

あー、ちくしょう、どうも慣れないなあ。

貧乏搖すりがぜんぜん止まらない。止めよつとゆつても止められないのだ。

「マコ力の傍にすり、こてられないなんて……」

父さんもなんかどんよりしてゐるし……。うつときつて男つてもつは情けなくなる

「……ねえ、二人とも」

そんな俺たちに声を掛けるのは、優しい微笑を浮かべているメガーヌさん。

「マコ力を信じて待ちましょ。」

信じて待ちましょ。言われてもな。

「あなたたちが不安になる気持ちは分かるわ。でも、あの子だって、子を産むのを受け入れて、試練を受けているの。だから、あなたたちは、あの子が必ず無事でこるって信じていればいいと思つの」

メガーヌさんはそう言って、俺の手を優しくそつと握る。アルスさんは、父さんの頭をグリグリと撫でる。

俺と父さんは互いの顔を見合つて、互いに笑みを浮かべて頷いた。

そうだよ……母さんはがんばって試練を受けているんだ、そんな母さんを信じて待たないでどうするんだ。

だから

「それじゃあ、父ちゃん。 ひょっと早くこなさい、母さんの退院祝いで
も寿えよっか

「ひょっと早くこなさい、父ちゃんと一緒に母さんの祝事を寿えよっか。

必ず帰つてやるから」とを前題にして。

「やうだね。 料理はマジカの大好物でも作るつか」

「フレンチは何こなしうか…… ペンダントがあるへ

「へへん、いや、料理本でも買ってあげよ。 少しほばいで出来
るよこしなこと

母さんの祝いにこなして話しあつて一時間後。

『やあやあー やあやあー やあやあー やあやあー やあやあー やあやあー』

赤ちゃんの泣き声が聞こえ、俺たちは立ち上がった。

そして、手術室の扉が開き、看護婦さんが小走りで「ひらひら」やつてきた。

「おめでとうございます！ 元気な女の子が生まれましたよー。」

「つ、マリカは大丈夫ですか！？」

切羽詰つた父さんの顔に、動搖せず看護師さんは「無事ですよ」と言つて頷いた。

「がんばった奥さんに声を掛けてあげてください、皆さんも」

看護師さんがそう言つたのと同時に、手術室からストレッチャーに乗せられた母さんが運ばれてきた。

「ああ、ルーク」

「マリカ、よく頑張ったね……」

「えへへ……下手な運動よりキツかつたよ」

母さんは力の入つてないへにやつとした笑顔で言つた。

「メガーヌ、アルス、あなたたちと同じ女の子だったよ、仲良くしてあげてね～」

「ええ、 もううん」

メガーヌさんは優しげに微笑み、アルスさんは力強く頷いた。
母さんは俺のほうを向いて、そつと俺の頭を撫でて、言った。

「コンク、 今日からあなたはお兄ちゃんよ。 あの子の
インハルトの優しくて良いいお兄ちゃんになつてね」

ア

第26話～誕生（終）（後書き）

AINHOLD、遂に生まれました！

これからもがんばっていきますので、よろしくお願ひいたします

第27話（前書き）

今回から、かなり時間軸を進めました。

アインハルトを書いたのですが……上手く書けたかな？

新暦71年。

朝7時、ストラトス家の二階にある一室。

そこには14歳となつたリンク・ストラトスの部屋、そこで彼は今心地良い寝息を立てながら眠つていた。

今日は春休みの初日ということで気が緩み、さらにはアルスの特訓もないということ、スヤスヤと眠つてゐる。

起きる気配はまつたくなく、ただただ寝息だけが支配する部屋にガチャリと扉が開いた音が響いた。

「うう……やつぱり、ねむつてます……」

碧銀の髪と紺と青の虹彩異色が特徴的な少女、リンクの妹 アインハルトだ。

「おにいちゃん、おきてください」

アインハルトは兄の身体を揺り動かすが、リンクは起きることもなく寝息を立てていた。

「むう～～、だつたうひです」

舌足らずな言葉でそつと、アインハルトは布団のなかに入る。

「…………」

大好きなリンクの香りに、AINHARDTはポーとしてしまったが、頭を振つて、すぐに気を取り戻し、

「ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

「ひぐ、あはつ、はははははははははははははははははははは

リンクの脇下やお腹などを擦らせ、強制的に起こした。

その笑い声は一階のリビング　一人の父であるルーカや、母のマリカまで聞こえていた。

「あらあら、本当に仲がいいわね」

「やうだね、ついほのぼのしちやうよ」

* * * * *

リンク side

「……AINHARDT、なんでこんな時間帯に起こしたんだ？」

ベットで座つてこるAINHARDTに俺は尋ねた。

今の時刻は朝の七時……。こんな朝早く起しなくてはいけないじゃないか。

「うう、その、ええと」

「ええとじゅなこよ、一体どうして俺をこんな時間帯に起しだんだ？」

俺は優しく聞くとアインハルトは恥ずかしそうに俯いた。

「ああ、その、みなさんとおでかけですよね……」

「ん？ ああ、わうだな

アインハルトの言ひとおり、今日はレノンやセラと一緒に出かける予定。自然公園で弁当を食べたり、買い物などのことをセラが提案してくれた。

「わ、それで、うれしくて、つこはやくおせりつて……、やくそくのじかんまでこいつしょにあそびたいなあって……」

恥ずかしいのか頬を紅くしながら、やうやくアインハルトに、

「可愛いなあ、アインハルトは~~~~~」

俺はアインハルトを優しく抱きしめ、スリスリと頬ずりした。

「うやあ、ここわーん

頬擦りされるのが嬉しいのかAINHARDも俺に返すようにスリスリと頬擦り返してくれる。

ああ、もう、なんて愛くるしいんだ！

クスクス、仲がよろしいですね、お一方は
エクセリアスは微笑ましいと言わんばかりに、そう言ってくれるのが嬉しい。

あははは、お前も実態化出来れば、仲良し三人組ができるのにな。

仕方ありません。仮に、もし私が出てきたら、みなさん驚かれるし、なにより管理局に田につけられそうですからね……

……そうだったな、すまなかつた。

俺のためを思つて考へてくれたのに、俺の軽はずみの発言で寂しくさせたことを、エクセリアスに素直に謝つた。

俺はAINHARDを頬擦りしながら、エクセリアスとの対話を終えた。

第28話（前書き）

最近、リアルに忙しくって全然書けない……

玄関前で俺たちは靴を履き、向かって合った。

「ハンカチ、ポケットティッシュを持ったか？」

「はい」

「ちゃんと財布持ったか？」

「おじいちゃんが買つてくれた、ねこさんガプリントされたおサイフ持つてます」

「お弁当せひちゃんと持つたか？」

「はい　おじいちゃんもひもひましたか？」

「うそ、ちゃんと持つているから、大丈夫だ。
お菓子は持つたか？」

「はい　わたしのだいすきな、チヨコパイも」

「置いてきなさい」

俺はアインハルトの額に軽いトロッピング

やつぱり、持つて行く気満々だったが、お菓子はいらないぞ。

ところが、お菓子はセラが用意してくれるからこりなにっての。

「うへへ、ひじこですか、おじいちゃんは

「酷くないぞ俺は

恨めしい田 と黙つても上田遣いで睨んでいるので、全然怖くない。

そんな不満げな様子のアインハルトの頭を優しく撫でると……。

「ふにゃ~~~~~

猫のよつな可憐りじい鳴き声を出すと、俺の手のひらに甘えるかのように擦り寄ってきた。

いやへ、愛へるしこな~。

「わあ、むつとナーナーして欲しかつたら、チヨコパイを置いてきなさい」

こくりと頷いたあと、アインハルトは靴を抜いで、タタタツと元気良く走つて行つた。

30秒後。

「よし、そんじゅあ行くわ

「おひきました!」

キラキラと輝く笑顔のアインハルトに背を向けて言うと、手を掴まれ、

「おひこへだれこ、やくそくのうたうたうしてだれこ」

上田遣いでそつとてくぬアインハルトにせんと胸の鳴りを感じた。

抱きしめたいと思つたが、そこは我慢して、俺は優しく頭を撫でた。

「ふみや～～～」

アインハルトは鳴き声を出すと、今度は俺の胴体に抱きついてきた。

いや、可愛らしきな、本当。

抱きしめてあげたいとは思つてゐるが、時間も時間だ。

俺は優しくアインハルトを引き剥がし、笑顔を見せて、

「それじゃあ、行こうか？」

「あい！」

あい？

AINHARDTは自分の言ったことに気がついたのか、すぐに慌てふためいた。

「はうー、ちがいます、今のはちょっとかんだだけですー。」

「…………」

ああ、もうなんて可愛らしい妹なんだ。

俺は慌てふためいているAINHARDTの頭をグリグリと意地悪く撫でてやつた。？

「あー、もうそれもう行かないと。行くよ、あいちゃん？」

「お、おこにけやん、いじわるです」

* * * * *

待ち合せ場所はある喫茶店。

その喫茶店は「ンクリーントとかで作られた他の建物やカフェとは違ひ、レンガ製で少し歴史を感じさせる造りだ。

俺はその喫茶店の扉を開き、店内に入った。

「こりゃいませ……あーリンクくん、AINHARDTちゃん」

店内に入ると、Hプロンを付けた金髪を三編みにした二十代の女性 Hリアさんが笑顔で俺たちを迎えてくれた。

「Hリアさん、どうも」

「お、おはよ、じゃあまーす」

AINNHALTは俺の後ろに隠れながらも挨拶をする。

この子は人見知りするので隠れるのも無理もない。

「はい、ほんにちわ」

「よお、またここを待ち合わせ場所にしやがったな

からかい気味に俺たちに絡み、厨房から出でてきたのは銀髪をポーテールにした三十代の男性。

「ルーネスさん、許してくださいよ。ここでHーヒー飲んでつてるんですから」

「Hーヒーだけだろ。他にもなんか頼めよ」

全くと言わんばかりに苦笑して、奥のテーブルに指差す。

「あいつはもうとっくに来ているから、あの子が来るまで待つてやれ、そんでもってなんかを頼め」

当たり前ですよと書いて、俺たちは奥のテーブルに行くと。

「おはよー、一人とも」

そこには、ジーパンにYシャツ姿といつらな格好をしているレンの姿があった。

やせ細い身体をしているけど、服の下は筋肉が結構ついている、腹も翻れてくるほどだ。

「よお、レン。 早いな」

「おはよー。 おはよー」

「おはよー。 早いって、君もこの時間帯に来てるよせこ、よく言つよ」

AINHARDTには優しく接するよせこ、俺に対しては冷たいなお前。まあ、どうでもいいけど。

AINHARDTは何かを求めるかのように俺を見つめるが、俺はあえて無視して、席に座る。

「ん? どうした、AINHARDT。 座らないのか?」

「…………」

俺的にはちょっとした冗談のつもりだったのだが、思ったよりもAINHARDTの機嫌が悪くなつた。

やれやれと苦笑しながら、AINHARDTの両脇を優しく掴み上げ、膝元に置いた。

「……えへへへ」

AINHARDTは嬉しそうに笑うと、顔を俺の胸に近付きスリスリしだした。

そんな可愛い妹に俺は優しく撫でてあげる。

「はいはい、ご馳走様です。すいません、ブラックコーヒー二つと『アグダセー』

「あれ？ レノン、お前つてブラック飲めたっけ？」

「こいつはまだミルクを入れるレベルのはずなんだけど……。

レノンは俺の考えていることが分かったのか苦笑しながら、

「そんな甘々な場面を見せられちゃ、カフェオレなんか飲めないよ

……？」

第28話（後書き）

年齢は違つけど、ルーネスとエリアを出しました。

自分、ルーネスとエリアは幸せに生きて欲しいです。

第29話（前書き）

今日は早く投稿できました……私的に見ればですけど

リンク side

ルーネスさんの作ったコーヒーは美味しい。コクと苦味の絶妙に合
わさったこの味はインスタントや他の店じゅ出せない。

「うん、美味しい」

「？ そんな、まつくりこのですか？」

「おう。アインハルトがこの味を理解するにはまだまだ早いかも
な」

「コアの入ったカップを両手で持ちながら上皿遣いで見てくるアイ
ンハルト。

そんなアインハルトを抱きしめたいと思つたが、さすがに危ないの
で頭を撫でる程度にした。

「むにゅ～～～」

撫でられたことによつてアインハルトは嬉しそうな声を上げて、俺
の体に寄つかかつた。

さてさて、それは置いといで……。

「……なに、リンク

俺の視線に気づいたのか、レノンは不機嫌そうに俺を睨みながらも「ブラックコーヒーにミルクを入れる やっぱり入れやがったな、こいつは。

まったく、せつかくのブラックコーヒーが勿体無いじゃないか、といつより最初からブラックコーヒーを頼むんじゃねえよ、勿体無い。俺の考えていることが分かったのか、レノンはふうと息をついて、コーヒーを口に運んでいきながら言つた。

「……僕は子供舌なんだから、ブラックは飲めないんだよ、君と違つてね」

「……あのよ、それ自分で言つてむなしくないか?」

俺の言葉にレノンはピシッと飲む格好のまま固まつた。俺の言葉に一理あると思ったのだろう、若干陰が生まれだした。
まあ、同情はしないぞ、といふか自分で自爆したんだから自業自得つてしまつ。

「レノンさん、どうしゃもつたんですか?」

固まつてしまつたレノンの姿に、AINNHALTは首を傾げながら俺に聞いてきた。

さすがに言つてしまつのはかわいそつなので、俺はただただAINNHALTの頭をそつと撫でた。

＊＊＊＊

「コーヒーを飲み終えた俺たちは彼女が来るまで、他の飲み物でも飲もうかと思いメニューを取ろうとしたときに、ガチャリと扉が開く音が聞こえたので、俺たちは扉のほうへ向いた。

両手には青色のハンドバッグを持ち、バック淡い色の桜の髪をサイドテールに、膝元しかないミニスカート、そしてこれまた淡い色の桜のTシャツを着てその上にYシャツを羽織つている少女 セラ・フォロンの姿があった。

「はあ、はあ、遅れて」めんね。寝坊しちゃって

「氣にするなって、ただレノンは内心怒りまくってるぞ」

「あー、めんね、レモン」

「いや別に怒つてないよ、リンクの嘘を真に受けないで」

なんだよ、そこは「本当だよ、まつたぐー」と叫うべきだろ。相も変わらぬ、つまらなこやつだな……。

「ね、やせつ、おこちやんのこゝたとつです。 ハーンセ
んせつめいなこゝとです」

「？」

アインハルトの言葉で、厨房にいる笑いを止められずに噴出してしまったルーネスさんの声が聞こえた。

あつ、ルーネスさんだけじゃなくつて、店の中にいるお姉さんやバイトの店員、エリアさんにセラまで忍び笑いしている。

レノンは頬を引かせながら、アインハルトに聞く。

「…………どうことじとだい、それ

「だつて むぐ

「さて、セラも来たことだし、早く行こうか?」

また面白こじとを言つ前にアインハルトの口を塞がれ、抱き上げる。

恨みがましい目で俺を見るレノンを無視して、俺はバイトの店員さんにお金を払い、セラの元に近づく。

「よへ、可愛らじに服着てこむじやないか

「う、そ、そりへ?」

「髪色と同じ色合この服を着てこむし、何よつセラがいいからな

服とこののは着る人によつて違つてくるのだ とどつかの雑誌に書いてたよつな気がする。

だからといつて嘘は言つていない、だつてセラが似合つのは事実だし。

「あつがどう」

ほめられたことがうれしかったのか、セラはうれしそうに笑みを俺に向ける。

その微笑みに俺はちょっとドキッと胸がときめいた 成長すると見慣れている微笑みでも胸がときめくんだな……。

ほめたことで、俺もちょっと恥ずかしくってつい頭を搔くと

「……ていつ」

「ぐふっ」

突然、腹部に軽い衝撃が奔つた。

いつもだつたら、こんな衝撃に耐えることなんて容易いんだけど、今回は気を抜いたのと

「むう～～～」

可愛い妹であるアインハルトの攻撃だからこそできなかつたのだ。

これが弟だつたら怒りたいところだつたのだが、如何せん妹なのでさすがにできないので、

「ひひ」

「さううーー？」

軽いデコッピングでアインハルトの行動を戒める。アインハルトは大

げさに悲鳴みたいなのを上げるが、そんないした痛みではない。

「「」なんことをしちゃいかんぞ？」

「「」うへへ、はい」

アインハルトは恨みがましい目で俺を見るが、そこは無視無視。

反省し、ちゃんと謝つてくれれば、文句はないのだが まあ当の本人は脹れつ面をしているが。

俺とセラは顔を合わせて、困ったように笑みを浮かべた。

「むう～～～～！」

「ぶう～～？」

それが気に食わなかつたのか、アインハルトは思いつきり俺の顎を打ちつけてきた 本当に反省しているのかと疑問に思つてしまつた。

* * * * *

「ははは、あの兄妹はやつぱり面白いな

「ええ、そしてとっても可愛らしく……」

リンクとセラが微笑み、アインハルトがそれを気に食わないのか、リンクの顎を打ちつけるという光景を厨房から覗いて見ながらそう言うルーネスとエリア。

傍からみれば「そつか？」と言いたくなるが、しかし一年間あの子たちを見ているのでそつ言えるのだ。

ほのぼのと光景を見ているエリアの耳元にルーネスはささやいた。

「俺らも、もう一人くらい子供作るか？」

エリアはすぐに頬を赤く染め、バツと振り向いてみると、ルーネスがニヤリと口元を浮かべいた。

「つっ！ バカッ！」

エリアはルーネスを怒鳴り厨房から出て行つたが、

「…………クス」

その顔にはまんざりではないといった表情を浮かべていた。

* * * * *

リンク side

「それじゃ、自然公園に行こうか

『はい』

AINHARDTとセラ、さらにいつの間に加わったレノンが合わせて返事したのを聞いて、扉のドアノブに手をかけて開いた。

さあ、自然公園に行きましょうか！

第29話（後書き）

自分、ルーネスとエリアは幸せになつてほしいです。

ですので、あのイチャイチャを書いてみたんですが……どうですか？

第30話（前書き）

ほのぼのの路線で書いていきたいと思います

リンク side

ミッドチルダの首都、クラナガンから遠く離れた地方 と言つても
バスで2～3時間かかる程度 に、サスーン自然公園はある。

近代的な建物や乗り物に溢れた都心と違い、昔から残る自然の風情
に溢れた場所だ。 休日には、田まぐるしい都心から開放され、自
然の癒しを求めてこの場所を訪れる人が多い。

そんな自然公園で、可愛らしいシートを地に張り、そこで座つてい
るセラはジッと俺たちの箸 アインハルトはフォーク に挟ん
でいるおかずを見ている。

……正直食べづらい。

なぜ、セラがじつといつまで見る理由 それは俺たちに始めて自
分で作った料理を食べさせるから。

俺はパクッと端に挟んでいた卵焼きを食べる 噛んで噛んで、そ
して飲み込んだ一言。

「おおう、美味しい」

偽りなんて何もない、正直な感想だ。

「ホント？ よかつたあ……」

俺の言葉を聞いて、セラは安堵の息を吐いた。

……そんなに心配する必要ないこと畢ひさし。

「うん、本当にねこしこよ」

「おこしいです」

ほら、レノンとアインハルトだっておいしいと言ひてるじゃないか。

分で本を読んでいたんだから

二人とも、ありがとう。うれしいよ。

「なるべくいいからほ早い者勝ちだ。」から揚げいただわ！」

- あゝ、あゝ、あゝ！？

わたしはたまに羊飼をせひします

「アインハルトちゃんまで！？」

ふつ、レノンよ、早く取らないと無くなるぞ。

＊＊＊＊＊

『おちやつまでした』

「はい、お粗末さまでした」

弁当の中身全部を食べ終え、俺たがせやんと食後の挨拶をする。

全部食べててくれたことがうれしいのか、セラはとびっきりの良い笑顔で俺たちに会つ。

「よしひ、食後の運動と行ひりじやないか

「はーー。」

俺の言葉に勢によく返事をしててくれたのはアインハルト。

セラは弁当をハンドバックの中に入れながら、微笑ましい田で俺たちを見る まるで慈母みたいに見てくれる。

「元気だね、君らは」

あきれ気味に俺たちに声をかけてくるのはレーン。 しかし、放つた言葉とは裏腹に肩を揉み、身体を軽く伸ばしたりしていた。

…… やる気満々じゃねえか。

「…………レーン、会つてることでせんぜん違つよ。」

「へ、ひめじいな……」

レーンは恥ずかしそうにながら、セラに返事を返した。

「そんじやあ、何にしようか…… よし、鬼ひつじだ」

「いや、ほかにも人がいるから迷惑になるんじゃないかな？」

「うーん、じゃあ、缶蹴り」

「缶なんてここにないじゃないか、しかもここから自販機まで結構遠いよ」

「えー、そんじゃあ、トランプ」

「もはや運動から外れているじゃないか！？ もうと考へてよーーー。」

等々、俺とレノンの漫才が繰り広げていると。

「……アインハルトちゃん、私と一緒にキャッチボールしようつか？」

「ボールもつてるんですか？」

「うん。 ただ、そのボールはやわらかいボールなんだけどね」

そんな会話がしていることなど知らず、俺たちは漫才まがいなことをしながら言い争っていた。

第30話（後書き）

……やんとほのぼのできっこましたかね（汗）。

途中、ギャグも入っちゃいましたが……。

リンク side

「……平和だねえ」

柔らかい芝生の上に寝転がり、アインハルトとセラのキャッチボールをしている姿を見て、俺は思わず笑ってしまう。

平和で心優しい風景を見ているようで、どこか微笑ましく見てしまう。

レノン？ ああ、あいつなりさつきジュースを買わせに行つた。じんけんで負けたからな……。

「いやー、本当に和むよな～」

まるでお父様のよひなことを考えてこますね、マスター

エクセリアスはどこか呆れながらも、俺の言葉に同意なのか笑つて言つ。

「やうかな？ 誰でもあの光景を見ればそりやうよ

ふふつ、それもそうですね

俺の言葉に同意をするエクセリアス……そりやうだつだつだつ。

あの光景を見て、微笑ましくもなければ和まないとか言つた奴はこの俺が直々にぶちのめしてやる。

……何を考えているのですか、もう

え？ なに？ 俺なんか悪いこと言つたか？

むしろ正論を言つたような気がするだ。

もういいです……はあ

エクセリアスは俺の言葉に呆れたのか、ため息をつきながら帰つて行つた。

一体なんだつたんだ？ あいつは……。

「ふわああ」

心地よい太陽の光に、芝生の上で横になつてゐるところにともあつてか、眠気が襲い掛かってきた。

その眠気に俺は負けて、瞼を閉じた。

* * * * *

「あー、ボールが」

ボールはアインハルトよりも高く上がり、そのまま投げられた方向へと飛んでいく。

「アインハルトはそのボールをすぐさま追いかける。

そして、そのボールは吸い込まれるよ／＼、リンクの顔にポンと当たり、口ロロロと傍らに転がる。

「おこにちやーん、取つてくださいーー」

アインハルトの呼びかけにリンクは答えず、ただただ沈黙していた。もしかして、怒らせてしまったのかも……。

「ハハ……」

アインハルトは不安で暗くなってしまった。なるが、すぐさま頭を振る。

優しい兄がそんなことで怒るはずがないと言ひ聞かせ、歩き始めたトテトテと擬音が似合つた。歩みで。

「おこにちやん？」

アインハルトはリンクの顔をのぞいてみると、そこには心地よい寝顔ですやすやと眠つているリンクがあった。

「ねむつてる……」

「アインハルトちやーん、びひつた

「じこーです」

声が大きいセラにアインハルトは人差し指を唇に添えて言つ。

セラは片手で口許を抑え、リンクの顔を覗く。

「……寝ちゃつてるね」

「……ねちゃつてます」

「……私たちも寝ちゃおつか？」

「さんせいです」

セラは仰向けになつているリンクを横たえさせ、そんなリンクの胸の中にアインハルトは潜り込み、セラはリンクの隣に横になる。

左にはセラが、真ん中にはアインハルトが、右にはリンクといった川の字寝となつた。？三人の身体は離れすぎずも近付きもせずといった感じである。

……髪の色合いこそは違つが、その姿は微笑ましく、まるで家族のよう、更には新婚夫婦とその子供に見えるのは作者の氣のせいだろうか。

その数分後、2人分の寝息が追加されたのは言わずもがな。

* * * * *

さてさて、ジャンケンに負けて、ジュースを買いに行かされたレノンは。

「……やれやれ」

頭に手をやりながら、首を振っていた。まるで、頭が痛いと言わんばかりに。

その理由といつのは

「おい、人の顔を見てため息つくんじゃねえよ」

「兄貴、こいつぶちのめそづせ」

首には金色のネックレス、そして鼻にピアスといった柄の悪そうな男と、ヘッドホンつけた柄の悪そうな男の2人に、ガンつけられているからだ。

第32話（前書き）

訂正いたしました。

レノン side

柄の悪い二人の男の人に睨まれながら、僕はもう一度ため息をつきかつたが、そうしてしまつたらこの二人にまた言われるから押し留める。

いつたいどうして、こんなことになつてているんだっけ？

* * * * *

今から、3分前のこと。

確か、じゅんけんで負けた僕は、自動販売機を探していたんだ。

そして、ようやく見つけた自動販売機で、ブラックコーヒーとオレンジジュースとサイダーとピーチジュースを買い終えた僕はジュースをポケットの中に突っ込んで、リンクたちの元へ戻ろうとしたとき、

「おいおい、じいさんよー、人にぶつかつておいて、『『めんなさい』』ってだけかよ？」

「なにを言つているの、そつちが勝手にぶつかつてきたんじやない！」

ガラ悪い声に振り向くと、そこにはおじいさんと孫であらわの強

い僕たちと同じぐらいの年頃の金髪の女の子が、これまた柄の悪そうな男一人、首には金色のネックレス、そして鼻にピアスといった柄の悪そうな男と、ヘッドホンつけた柄の悪そうな男の2人に絡まっていた。

……腐っている奴らだね、いたいけなおじいさんとその娘さんを襲おうだなんて。

僕は思わず舌打ちをし、足をおじいさんたちのほうに向かうとしたとき

「ひぬせえ、邪魔すんじゃねえ、ガキ！」

「あやあつーー！」

「セリスーー！」

女の子は鼻にピアスをつけた男に突き飛ばされ、僕はすぐさま走る。地面に尻餅つきやうな女の子の両脇下に手を滑り込ませて、つかせないようにした。

「大丈夫？」

「あ、ありがとー！」

助かったと言つやうな表情を浮かべて、僕に頭を下がった。

怪我がないようでよかったです。

「セリスっ！」と駆け寄ってきたおじいちゃんと女子の子を、僕は後ろに下げる。

「おーおー、かっこいい兄ちゃんに助けられてよかったですー、じいさんに譲ちゃん

「ひつひつひ、兄ちゃんよ。今なら、その子を渡せば、助けてやるぜー」

一人が馬鹿にしたような笑みで僕を見る おそらく、見た目で僕を判断したんだろう、簡単に倒せる細身の奴という、見た目で。

まったく失礼な彼らに僕は思わず、

「……やれやれ

頭に手をやつながら、首を振るつ 馬鹿を相手にしているのも苦痛だと言わんばかりに。

「おい、人の顔を見てため息つくんじゃないよ

「兄貴、ここつぶちのめそつせ

* * * * *

そうだそうだ、それが原因だったね。

……といつか、これだけのこと、怒らないで欲しいよね。

ヘッドホンつけた柄の悪そうな男は、苛立った顔で僕を睨み、拳を

眼前に持つてきた。

もしも、リンクがここにいて、これを見たら、このひだりうね。

「『単純』と言つた名の馬鹿だ』

あ、いけない、つい言っちゃつたよ……。

ヘッドホンつけた柄の悪そうな男 もうヘッドホン男で良いよね
は、強く握り締めた拳を僕の右頬に思いつきりたたきつけられ
る 前に、僕はヘッドホン男の顔面の額を正拳突きで殴った！

「ギヤー！」

脳を揺さぶられたことによって、ヘッドホン男はおぼつかない足元で後ろに下がっていき、ついには仰向けて倒れた。

……カンちゃんって、ネーミングセンス悪いね。 いまざきいない
と悪うよ、カンちゃんって。 まあ、そればどいでもいいか。

鼻にピアスの男は「ええええええええ！」と奇声を上げながら、腕を振り上げるけど

甘い

まるで教官のよつと叱るよつこやつとつてあげて、僕は上段蹴りで鼻にピアスの男に、これまたカンナやんとやんと回じよつて、顔面に蹴りを入れた。

「ふらあ！」

奇声を上げながら、鼻にピアスの男の人は仰向かで倒れた。

「んなに弱いの！？」

あまりの呆気なさに僕は一時呆然としてしまつたが、それは三秒で消し去り、僕は後ろにいる2人に声をかける。

「あの、大丈夫ですか？」

「おお、お前さんのおかげで無事じやつたよ、ありがとつ」

おじいちゃんは氣のいい笑みを浮かべながら、僕にお礼を言った。

女の子は氣が保けていたけど、すぐにはつと氣づいて、僕に頭を下げる。

「おじいちゃんを、わたしたちを助けてくれてありがとつ」

「いいえ、気にしないでください。無事ならいいんですよ、それじゃあ僕はこれで」

僕はその場を離れて、すぐさまリンクたちのもとへと向かおうとしたとき、

「お前さんの名前、聞いてもいいかの？」

「え？ でも……」

「恩人の名前ぐらい聞いても言いじゃろ？ 儂の名前はシド。 そして、ヒッチは」

「孫のセリスよ。 さあ、あなたも名前を言いなさい」

……もし、ここで去つたら、確實に僕はＫＹという称号をもつてしまふね。 それだけは流石に嫌だから、僕も名前を言ひつ。

「僕はレノンって言います。 ？ また会えたら、いいですね」

笑顔でそう言って、僕は頭を下げて、リンクたちのほうへと向かった。

* * * * *

「……寝てるし」

リンクたちのほうへ戻ってきた僕。

でも、肝心のリンクたちはグッスリと眠っていた。

三人はまるで家族のよう、リンクとセラはまるで新婚さんのように側らで眠っていて、アインハルトちゃんは2人の中心部分で眠っている。

……なんだろう、この家族風景は。

といつも、起こすのがめっちゃ勿体ないね。
せてあげようかな。

もう少しだけ、寝か

僕はポケットからサイダーを取り出して、プルタブを開くと

「ふばあーーー！」

大量に噴出し、僕の顔にクリーンヒット。

第32話（後書き）

レノンは弱くないですよ。

どのくらい強いかっていつたら……うん、ギンガよりも上ってレベルつかね？

でも、物語の進行具合にこよつては、変わるかもしれませんよ。まだ分かりませんが、

第33話（前書き）

いや～、更新が遅くなりました。

理由は、やつぱり学校と昔のゲームのせいですね

クロノクロス、そしてチョコボジャー

草も生え、花も咲き、全面的に緑とその花の色に彩られた草原。その場所に、一人の若者 髪と瞳の色合いは違うものの、その顔つきはリンクに似ていた と白衣ドレスを纏つた女性が幸せに微笑んでいた。

若者は女性の脚を抱き上げ、額と額を「シシ」と軽く合わせる。

眼と眼が合つと、一人は笑い合つ 本当に幸せそうに。そして、一人はそっと顔を近づけ、そして

……幸せな光景だったな、あれ。

桃色空間が充満していく、もつお腹いっぱいだな、ありや。俺はいい加減に起きようとして、眼を開ける。

「おはよう、リンク」

「おはよう、おはようよむおひなちゃん」

セラとアインハルトがひょいと覗き込んできた。

行動が可愛らしい一人に笑い、俺はアインハルトの頭を撫でる。

「おー、おはよ。 というか、先に起きてたなら、起こしてくれたつていーじやないか」

「うーん、 そななんだけど。 寝顔が可愛くて、起こすのが勿体なかつたから。 ね？」

「はいです！」

セラはアインハルトに答えを求めるかのように聞くと、アインハルトは思いつきり頷いた。

可愛い……って。 男の俺に言つたよ、全然嬉しくない。

あの子たちの言つ通り、可愛かつたですよ。 マスター

……だから、全然うれしくないつづり。

「よお、よく寝てたな、リンク」

レノンの声じゃない、またぐの第三の声が聞こえて、俺はそつちに振り向くと、

「ああ、新婚夫婦さんじやないですか」

「『まだ』？ といつことは将来……」

「『まだ』違う（わよ）……」

「『まだ』？ といつことは将来……」

「おおーと！ お前らなんでここにいるんだー！？」

ちつ、逃げやがった。

もつすぐ新婚夫婦になるだらう一人 ティーダさんは慌てふためいてレノンに聞いた、まるで助けを求めるかのよつ。

そして、もう一人の人物、オーリスさんは氣恥ずかしげに顔を伏せている。オーリスさんはなんか初々しいな。いや、ほら、俺の家族や他の家族らをみると、ついそう思つてしまつ。

そこで、ちょいと視線をティーダさんに戻すと、レノンが苦笑しながら答えた。

「僕たちはここで遊んでいたんですよ、弁当を食べたり、ボール遊びをしたりね」

「ふうん。レノン、こいつらと遊ぶのはいいけどよ、ティアのことも構つてやつてくれよ？ 最近、寂しがつててよ

「はあ……。つとそつこねば、ティーダさん、ティアナちゃんつて明日暇ですか？」

「？ ああ、暇だと思つけど……なんでだ？」

「実はティアナちゃんが見たがつていた映画のチケットを手に入れたんで、二人で見に行かないかつて誘つんですよ」

ほほう……それはいいことを聞いたぞ。

明日、ここいらを離けて観察でもするかな。

そんなことを考えてこねり、

「コンク、明日尾けないでね

レーンはいつもと笑顔を浮かべて居るが、眼は俺を睨みつけている。器用だな、こいつ。

俺は「了解」と苦笑しながら両手をあげる。

「おこりやん、どうしたんですか？」

「ん、なんでもないよ。アインハルト……よこしよ」と…

「ふきやあー」

俺はアインハルトを抱き上げて、胸の中に収める。いわゆる抱っこひもだ。

「よーし、お邊をひきこもること散歩したら、帰るとするか～

「ナニにえま……私たちでここでお廻りしちゃったから、このあたりよく知りなこんだっけ……」

「あひ、やうなの？ それじゃあ、散歩した方がいいわ。こねり

結構気持ちのいい場所なのよ

オーリスさんはセラに微笑んで、そう言った。

ん？ ちよつと待て。

「その言い方からすると、来たことあるんですか、リリィ。」

「ふふふ、ふうよ。それでね、リリィティーダさん！」

「おおーとー お前ら、暗くなる前に早く行くぞーーー。」

？

オーリスさんが何かを言おうとする前に、ティーダさんが大きな声を上げて、それを遮った。

ティーダさんはレノンの腕をつかんで、引っ張つていった 「痛いです、痛いです！ 引っ張らないでーーー。」 などと悲鳴が聞こえたが、無視。

ほほう、あの焦つよつだと、なるほどね。

俺と同じ答えをたどり着いたのか、セラは「ヤーヤー」ながら俺を見る。

俺も「ヤーヤー」しながら、一人でオーリスをここ離す。

「「お幸せでなによりで」」

「です」

「ふふつ、ありがとう」

オーリスさんは幸せそうに笑っていた。

おまけ

オーリス「それにしても、あなたたちって本当に息があつてるわね。
まるで夫婦みたい」

セラ「ふえー?」 アインハルト「む……」

リンク「夫婦ね……はは、それ合ってるかも」（息ピッタリだし、
俺たち）

セラ「ふええええええええええええええー?」

アインハルト「むうううううう～～～～～～！」

リンク「あいててててて！ ア、アインハルト！ 抓るな、抓る
な！ 痛い痛い痛い！」

オーリス「クスクス」

第33話（後書き）

これからも頑張っていきますので、よろしくお願いいたします！

第3・4話（前書き）

今回はほのぼのだけでなく、若干シリアスが混じっています。

拳と拳がぶつかり合い、蹴りと蹴りがぶつかりあつ。

「双刃斬！」

少年は自分の武器である竹刀を斬り下ろしから斬り上げへと振るつた。しかし、その刃は碧銀の髪には掠りもしなかつた。

「つづ、にやろー！」

袈裟懸けを放つたが、軽いバックステップで避けられる。

後ろに下がつた女性を追いかけるように少年は足を前方に踏みつけ、

「瞬迅剣！」

少年は突きを放つ 以前この技で友を吹き飛ばしたといつちよつとしたエピソードがある威力の ガ、女性は避けることなく刃を掴んだ。

女性はこの動作を簡単に行つてゐるが、普通の人間だつたら避けることなく吹き飛ばされてゐるだろう。

「まづつー」と焦りながら、武器を捨てよつと手を放そうとしたのだが、今度は手首を掴まれた。

女性は少年の武器を捨て、そして……。

「霸王断空拳……」

その少年の腹部に手加減の入った女性の拳が入った。

手加減されたとはいえ、やはり痛いものは痛いので、少年は腹部を押さえながら膝をついた。

女性は肩まで切り揃えた髪を払い、笑う。

「はい、おしまい。 まだまだね、リンク」

女性 マリカ・ストラトスは、少年であり自分の息子であるリンクにそう言った。

リンク side

「つべそ、また負けた」

悔し紛れに俺は竹刀を軽く地面に叩いた。

なんでこんなに強いんだ、うちの母親は。

「リンク、大丈夫!？」

仰向けになっている俺に覗き込むように見るのはセラだ。

「心配するなって、母さんはそれほど強く打つてない。 至って無

事だよ

「よかつたあ……」

俺の言葉に一安心したのかセリは安堵の息を吐く。

ところがお前も馴れぬ、この模擬戦といひ合の運動を。

まあ、結構マジでやつらがうなづかじな、お互に負けるの嫌いだし。

「ふふん、これでわたしの60勝0敗ね」

にやけ顔で俺にこいつてぐる母さことに正直言つて腹立つたが、事実なのでしようがない。

つたく、俺はこいつになつたる母さんやアルスさんこまともに勝つことができるんだ?

未だに追いつけないその背中……。

俺はこいつになつたらその背中を乗り越えられるんだ?

「ああ……遠いな、こんなべくじよ」

「え?」

「いや、なんでもない」

愚痴つたところでなんも意味ないが、コシコシと進んで行くしかないな。

俺は自分に言い聞かせて、立ち上がる。

「おこにちやーん！」

「おつと」

AINHARDTの声が聞こえたのと同時に、腹に軽い衝撃が奔った。

別にたいして痛くも痒くもないでの大丈夫である。

「おこにちやん、ジュースです！ のどがかわいていのう？」

「おお、準備！」苦労。今度、お前の好きな御菓子を買つてやる！」

「ほんとですか！？」

「但し！ 200以下のやつな」

「…………」

「…………」

母さんにスポーツ飲料を渡している父さんに向かって俺はため息つきながら囁く。

「父さん、いくら可愛い娘だからって、甘やかしちゃダメだ。知つてんだぞ、父さんがAINHARDTのために500もするお菓子を

買つたつて

「うぐ……」

一人娘だからか、父さんはアインハルトを本当にかわいがっている。
それは別に構わない、俺も母さんも可愛がっているんだ。

でも、いくら可愛いからって、500もするお菓子を買うのはダメ
だと思う。まだアインハルトは四歳だぞ。そのときのお菓子も
全部食べきれなかつたから、俺と母さんが食べたんだよな。

「あははは、そのせいで、マリカさんは体重増えちゃつたつて嘆い
てたね」

「うふ、まあ、しょうがないだろ」

結構、あのお菓子力口リー高かつたからな。

あのときの母さんの悲鳴すゞかつたな……。

確か、「みやぎやああああ～～～～！」だつけか？

色氣も何も感じられない悲鳴だつたな～。

まあ、それは閑話休題。

抱きついているアインハルトに「ありがとう」と言つて、頭を撫で
る。

「ふにゃ～」と可愛らしい声に微笑んで、AINHARDTの手の中に
あるジュースを取り、それを飲む。

うん、美味しい。

俺はゴクゴクとジュースを飲んでいくと、ふと思いだす。

そりゃ、今日は、レノンとティアナがデートする口じゃないか。
見に行きたいと思つても、レノンに釘刺されたから無理なんだよな
」。

「まあ、俺らは俺らでやつらじようか

「？ うん」「はいです！」

セラは戸惑いながら、AINHARDTはなにも考へずに声を出して頷
いた。

* * * *

レノン side

僕は待ち合わせ場所であるカフェのオープンテラスにて週刊雑誌を
読みながら、カフェオレを飲んでいた。

その中にある記事『地上が導入した【死刑制度】に本局激怒！』に
目が入った。

この【死刑制度】というのは重い犯罪 例えば、大量殺戮やテロなど を犯した人たちに掛ける制度。

今まで終身刑といわれるものだつたんだけど、地上の法律は甘いとのことで、2～3年前に地上で出来た制度、でもこの制度に反論したのが本局だ。

本局のとある提督さん曰く『犯罪者といえど、人間である。やりなおす切つ掛けを与えるべきだ!!』ということを言つたらしく、それがこの週刊雑誌に書かれていた。

これを見てリンクは、

『やりなおす切つ掛けを与えて、やり直せない人つているよな。特に大きな犯罪を犯した連中』とのこと。

そのときのリンクの言葉に僕は「確かにね」と頷いた。

軽い犯罪を犯した人ならともかく、テロを起こしたり多数の人を殺した人が正直言つてやり直せないと思つ。

といつも、こうでもしないと地上は守れないと思うし、最近のニュースじゃ、とある拘置場が犯罪者で万杯になつてゐるといつのも見たことがある。

やり直せるために拘置場を万杯にさせるなんてね……。

仮にもしもやり直せたとしても、世間の目は厳しい。そしてそのやり直せるお金を払うのは僕たちなんだ。はつきり言つて、善い目などしない。

(は、あめりかみが。 いたことを考へるのね)

考えるのをやめて、僕は週刊雑誌をゴミ箱に投げ捨てる。

(だつて今日は……)

「レノンセロー。」

楽しい田にならんだから。

* * * * *

ティアナ si de

ああもうー。 なんでこの口で寝坊しちゃったんだろうーー。

約束の時間まであと数分もないわ！

全速力で走つてゐるけど、間に合ひつかな……「ううん、間に合ひわせで
みせむ！」

レーンさんは優しいから遅刻しても怒らないと懲りけど、それでも
の人を待たせるわけにはいかない！

やつと見えてきた、待ち合わせ場所。

そこはオープンテラスで、週刊雑誌を読みながら、カフェオレを飲
んでいるレーンさんの姿が。

「レーンさん！」

私はレーンさんが座つてゐる席まで走つて、レーンさんの前に立つ。

「ギリギリセーフだね、ティアナちゃん。えらいえらい！」

レーンさんは優しく私の頭を撫でる。

それはどこか恥ずかしい、だけじゃなくてほしいなんて思ったこと
なんて一度もないわよ。

「それじゃあ、行こつか」

頭から手が離れるのが分かると、寂しさが募つた

けど、手のひらを差し出された瞬間、私はその寂しさが一気になく
なり、

「はい！」

嬉しさが身体中を満たしてくれた。

第34話（後書き）

レノンの考えたことは作者自信が思つたことではありません、レノン自身が真剣に考えたことです

第35話（前書き）

レーヴンとトーヤアナとのトーク編です。v

最近、リアルに忙しくなつてきちゃいました……。

更新遅くなつてしまいますが、これからも読んでください。

レノン s.i.d e

『例え、この我が身がどうなると、姫は私が守ります』

『レイ……』

そう言って、主人公であり騎士であるレイはヒロインであるお姫さまをそっと抱きしめる。

スクリーンを見ているだけなのに、口の中が甘くなつてぐるのを感じて、傍に置いておいたお茶を飲む。

今、僕たちが見ているのは、大ヒットしている『騎士と姫君』というものだ。これが結構面白いんだよね、アクションも意外と激しいし、恋愛パートも面白く、とてもハマつた。

だけど、この恋愛パートがちょっと……その……甘すぎるんだよね。比喩的な意味じゃなくて、言葉どおりの意味で。

……あれ、なんだか、お茶まで甘くなつてきたよ。

ティアナちゃんはどうだろ？……。

「…………」

真剣に見ていました……。

うん、まあ、女の子だからね。 いつこいつの元で憧れるのかな?

でも、とつあえず……。

(「の甘あがめの恋愛パート……早く終わらないかな?」)

本当に切実に願つよ、これは。

* * * * *

映画が終わり、僕たちはファミリーレストランで休憩し、そこでお昼ご飯を食べよつとしているのだけど……。

「はふう……」

メニューを見ずに、ただウツトリした息を吐くティアナちゃん。その表情は憂いに帯びていて、眼はどこか惚けていた。

「あー、ティアナちゃん?」

「……」

……ダメだ。 完璧にあつち側に行っちゃつて。

戻つてくるまで待つてみようかな? いや、それだと結構な時間を待つと思つし、ここで時間潰すのはもつたいたいから。

僕はティアナちゃんの眼前に近づいて、額に軽いデコボボ。

「いた!? な、なにするんですか……!?

「あ、やつと戻ってきた?」

正氣に戻った眼に僕は安心しながらティアナちゃんに向ひ、「

「は、ははははは、はひやー、ら、らいじょうぶですか

!」

「ん、そり?」

顔全体に真っ赤にしながら言ひセリフじゃないけど……ティアナちゃんがそり言ひなら、大丈夫でしょ。

僕はテーブルの上に置かれているメニューを手に取り、なにを食べようかと見ていると。

「…………レノンさんの鈍感…………」

「? なにか言つた?」

「いいえ、なにも!」

ティアナちゃんは拗ねた様子でメニュー表を見始めた。

? ……変なティアナちゃん。

* * * * *

お昼ご飯を食べ終えた後、僕たちじや総合スーパー『ディエンダー』にやつて來た。

二階は衣料品を取り扱っている、そこで僕たちも……。

「うーん、ティアナちゃん。やっぱり、そのジーパンはちょっと
駄目かな」

「で、でも、このまつが動きやすい……」

「でもね、女の子なんだからスカートも着なきゃ、ズボンは似合つ
けど、やっぱりティアナちゃんはスカートのまつが似合つてると思
うよ?」

「やつ……でしょ?」

「うそ、やうだよ。まじめに、試着してこきなよ」

膝元の長さしかないスカートを見ながら、ティアナちゃんは近くの
試着室へと入った。

完全に入つたことを確認した僕はそつとその場を離れていった。

* * * * *

「レーンさん、着ました……つたあれ?」

着替え終わったティアナは試着室を出ると、近くにレーンの姿がな
かつた。

(どうに行つちゃつたんだ……)

靴を履き、ティアナはレノンを探しに行こうとしたとき、

頬にヒヤッとした冷たいものが触れた。

「ひやあー。」

「あははははははは」

触れられた方向へ振り向いて見ると、いたずら子のような笑みを浮かべているレノンの姿があった。

「ち、もうー。レノンさんー。」

「あははははは、じめじめん。はー、ビハビハ」

レノンは左手に持っているオレンジジュースをティアナに差し出す。

ティアナは「もうー」と怒ったようにオレンジジュースを受け取り、フルタブを開けて、飲み始める。

「うん、やつぱつ

「?」

「せ、ティアナちゃん、似合つてね」

「ひー。」

頬を赤めることも、言葉を詰めることもなく恥ずかしげもなく言つ、この男。恐らく純粋に褒めたのだろうが、ティアナにとつては。

「～～～つつつ！」

最大の殺し文句だ。

最近、レノンを準主人公にしようと考えているこの頃……どうしよう。

第36話（前書き）

レオンとティアナのトークのお話は終わりです
次はどんな話しこしょつかな……。

レノン side

楽しい時間はすぐに過ぎるもので、もう17時30分となっていた。

『ディエンダー』でティアナちゃんが履いたスカートを買ったあと、僕たちはとある市民公園にいる。

そこのベンチで僕たちは仲良く座ってアイスを食べていた。

僕はメロン味で、ティアナちゃんはストロベリー味。

お互に違ったアイスを舐めながら、軽い雑談をしている。

「それじゃあ、勉強頑張っているんだ」

「はい、兄さんや義姉さんに教わりながら、コツコツと

「やつか……」

ティアナちゃんはティーダさんの夢であつた執務官を目指している。

ティーダさんはとある任務で大けがを負ってしまい、戦闘能力は大きく下がってしまったため、もう執務官を目指すのは無理だらうと言われてしまったんだ。

ティアナちゃんはそんなお兄さんの夢である執務官にならうとを目指

しているんだ。

……最初、僕たちは反対したんだけど、ティアナちゃんの強い眼に僕たちは負けてしまったんだ。

「ふふ、でもティーダさんがティアナちゃんに勉強を教えているのか……あんなに反対してたのに」

「義姉さんの説得のおかげです。『あなたのために頑張っているのにそれを否定するなんて……最低です』って」

「…………あつこ一言だね」

ティーダさんにとってはなによつてこと思つな……。

そんなこと、スバルたちに言われたら うん、確実に泣いちゃうね、僕だつたら。

「? レノンさん?」

「つは! な、なんでもないよ! -?」

危ない危ない……想像しちゃつたよ。

まあ、そんなことすぐ忘れよつ……あつ。

「ティアナちゃん、ストロベリーアイスちよつと食べさせてくれないかな?」

メロン味はもちろん美味しいんだけど、なんだか段々味に飽きてき

ちやつたんだよね。

だからちょっと口直ししたいんだよね。

「え？ いいですよ……あ、スプーンが」

パクリとストロベリー アイスを少しだけ口に咥えて吸い付いて離す。

うん、結構おいしい……ってあれ?

「ティアナちゃん？」

一 め、せ、え」

どうかしたの？」

変な発言ばっかするティアナちゃんに首を傾げながら、僕は聞いてみる。

それでもティアナちゃんは答える」となく、

『スラム』

えええ！？ 気絶してしまった。つてええええええええええ！？ なんでええ

* * * * *

ティアナが眼を覚ますと、まず眼に映ったのは見なれた自分の部屋の天井。

傍に置いてある時計が田に入ると、既に20時ばかりであった。

「……あれ？」

ティアナは自分がなぜここに、自分の部屋で寝ているんだろうと疑問に思った。

今日は確かレノンと一緒にデーター レノン自身そう思つているか分からぬが して いたはずなのに……。

ティアナが思考に没頭しているなか、ドアがガチャリと開いた。

「おひ、起きたか、ティアナ」

ドアを開けた隙間から覗き込んだのは兄であるティーダだった。

ティアナが目をさましていることを確認したティーダは部屋に入ってきた。

「兄さん……」

「レノンから聞いたぜ、お前気絶しちゃつたんだって？」

「…………」

ティーザの言葉にティアナはあのときの「」とを思い出したのか、頬が赤く染まつた。

「まあ、お前はまだ小6なんだからしょうがねえよ。お前にとって結構な威力だつたらしな」

「むう……」

「ヤリと笑いながら言つティーザに、膨れつ面になるティアナ。

「兄さんだつて、オーリスさん」にされたらやつなるもん」

「……うお、痛いといひを突くなあ、お前は」

「ふん、からかつた罰だもの」

（否定出来ないのが、悔しいぜ……）

実際、自分もオーリスにそりやられてしまえば、ティアナと同じように氣絶してしまつだらう。

そつ思えるからいや、否定出来ない。しかし、それを認めるのも男として悔しいのだ。

「まあ、」の話は辞めるか。腹減つただろ？ 飯にしよつ」

とつあえずは」の話を逸そつと、ティーザはティアナに夕飯を持ちかける。

そう言われたかどうかは分からぬが、ティアナは今更ながらお腹

から空腹感を感じた。

ティアナは頷いてベットから降り、ティーダは既に廊下と部屋の境を跨いだのではないかという処で、顔だけを振り向き、

「下でオーリスと一緒にテートの話聞かせてもらひぜ」

「つー？ 兄さんー？」

「ははっ、じゃあな」

ティーダが完全に部屋から出たあと、ティアナはすぐさまニヤリと悪どい笑みを浮かべる。

「ふふん、兄さんがそうするなら、私だつて……」

存分に聞いてやるひではないかと思つた。

兄であるティーダがどうやってオーリスに告白したのかを。

妹である自分にすら教えてくれないほど恥ずかしことをしたのだから、自分もデートの話をするのだ、それくらい ティーダ本人にひとつでは違うが のことを教えてくれたつていいだろ？

ティアナはにやつきながらドアノブに手を掛けた。

第36話（後書き）

レノンに嫉妬という怒りを感じる人よ……もつと感じていいですよ

ティアナはしつかりしてゐから小学6年生から兄さんって言ひそう

……。

第37話（前書き）

自分はリリカルなのは見たことないです、なのでトバイスによる戦闘の仕方など皆無に等しいです。

それでも良ければ、どうぞ♪

女性は手に持つて いる片手剣型のデバイスを振るい、襲い掛かつてきた魔力の弾丸を全て払い落とす。

さらに襲い掛かつて くる魔力弾は地面を蹴り、跳躍して、全てを避けた。

地面に着地した女性はすぐさま田の前にいる、魔力の弾丸を全てが避け切られたことに動搖を隠せない女性魔導師に突っ込んでいく。

魔導師は「チーンバインド！」と言つて、4本の白い鎌のよ うなものを現せ、それを彼女に向かつて奔らせる！

女性は一度立ち止まり、すぐさま剣の刃に手をかける。

剣の刃を折りたたみ、逆に折りたたんであつた柄の部分を組み立てる、それは銃へと変形した。

「ブラスト」

『エリアブラスト』

デバイスから女性の機械音声が響くと、銃口から五発の魔力の弾丸が発射される。

魔力の弾丸は白い鎌の全てを破壊し、もう一発は魔導師のデバイスを吹き飛ばした。

武器を無くした魔導師は慌てて『テバイスを取りに行こう』と背を向けるが、

「終わりだ」

魔導師の首筋に刃を添えられてしまった。

最早、勝敗が決まつたのは当然だらう。

『そこまで。 勝者はライトニングだ』

女性 ライトニングは自身の『テバイス』『ブレイズエッジ』を待機状態である桜色のペンダントに戻すと、魔導師に見向きもせず、この部屋 訓練室を出ていった。

* * * * *

その戦いを観察していたのは、恰幅のよい太つた体格をしている40代の男性。

彼はこの戦艦・アースラ所属の武装隊のアモダ隊長である。

アモダはさつきまでの戦いをリプレイで見直し、二人の戦いのセンスによる長所と短所、さらには戦闘による注意事項に関するレポートを制作していく。

「さて、これが終わつたら、次はベテランの奴らを戦わせるか。 でもつて、新人共には観るよつにも命令出しておくれか

このレポートを書き終えるには一時間ちょっとといったところだ。

アモダは自分の部下たちにそのメールを流すと、再びレポートに手を掛けた。

「しかし、こいつの戦闘能力すげえな……」りや欲しがるわけだ

ライトニングの戦いつぶりを見ながら、アモダはそうポツリと呟く。魔力弾は身体能力で避け、誘導弾はデバイスで切り落とすか、バリアジャケットで払い落とすという荒技。

彼女は陸上警備隊に所属していたが、アースラの艦長である『リンディ・ハラオウン』がスカウトしたのだ。

リンディが「お試し期間として、アースラに入つて、三ヶ月間、アモダ隊長の武装隊に所属してもらえないかしら？ もしも三ヶ月間の働きが良かつたら、海に所属できるように進言するわ」と言つたらしい。

ライトニングは魔力値がAランクだつたため、『海』に入れるかどうか微妙であつたのだ。

しかし、近距離戦闘能力がAランク及びに中距離戦闘能力がAランクなのだ。

彼女が欲しいと思った、リンディは『海に入るかもしれない』と いうのを餌に、彼女に交渉した。

それに了承したライトニングはこのアースラに乗り込み、自分の隊

に入ったのだ。

(……だけど、あいつは海に入るなんて考へていなければ)

ライトニングが所属した一田田、自分を始めとする同期の連中が「お前はなんでアースラ（）に来たんだ？ 海に所属するためか？」とライトニングに聞いたら、

「私は別に『海』に所属する気はない。 ただ『金』を稼ぐためにやるだけだ」

それを聞いたとき、自分を含めた同期の連中は大笑いした。

「す（タマ）い根性を持っているな、お前」と……。

話がずれてきたので、
それはおいといて
閑話休題。

自分は長くこの武装隊をやっているが、ミッドチルダ出身の人間で出来る人間など見たことがない。

（ああ、いや……ミッドチルダ出身じゃなくてもいるつたりやはいるか）

一度、自分は彼と戦つたことがある。

彼の剣の腕、運動神経は『化物』クラスだったが、あの時は本当に心のなかが燃え上がった、そしてなにより楽しかった。

「おつと、ライティングのことは、あのバトルマニアには言わねえよつこもメールしておつか……死なせたくねえし」

……アモダの言つ『バトルマニア』とこつのは後に語りつ。

* * * * *

ライティング (Hクレール) side

私はスポーツ飲料を口に含んで、思いつきりため息をついた。

なんで、私はアースラ (ヒヒ) にいるんだ?

いや、その理由は一番分かっているのは私自身だ。

そう、主に金目的のために、アースラにいる。

海の平和なんて知つたことではない。

「……父さん、母さん」

亡くなつた、私たちの両親。

AINHARDTが生まれて一年後に両親は居眠り運転によつて死んでしまつた。

セラはアルスさんたちに引き取られたが、私は陸上警備隊に所属した。

普通の仕事よりも管理局のほうが良い給料がもらえるし、なにより

セラたちの生活を守りたかったからだ。

「のむすなに……」

リンディ提督の「給料三ヶ月分」に乗せられてしまったことに私は後悔している。

陸上警備隊の二倍ぐらいある給料に惹かれた私……愚かなことをしたと思っている。

陸上警備隊だつたら、時々だが、セラたちに会えて、そして頑張れとこつ声援をもらえるので、まだ良かったのだ。

でもこりは戦艦だ、そう簡単に会いにいけない……。

「会いたいな……」

セラたすけて貰いたい。

「頑張れ」と……。

第37話（後書き）

ライトニングもといエクレールさんは軽いホームシックになりかけています。

修学旅行に行って、一人になると、そうなりませんか？

自分はそうなります。

第38話（前書き）

今回もリンクの出番はありません。

黒いスーツを全身に纏い、青と銀の甲冑が胸部と手脚を鎧つて、力
ブトムシのような仮面が頭部を覆っている戦士が住宅街を歩いてい
た。

戦士は注意深く辺りを見渡し、真新しい一いつの住宅の間に古さあいだが目
立つている住宅を通ると

「つ！」

突然、戦士は前方に慌てて転がつた。

すると、その数秒後には戦士の立っていた場所が魔力の砲弾がぶつ
かり、深い穴が広がつた。

戦士は鉄甲に付いてあるENTERキーを押すと、タッチパネルが
出現した。

タッチパネルには銃のパネル、剣のパネル、砲撃のパネル、鎖と輪
のパネル、四つが現れた。

戦士は銃と砲撃のパネルを押し、ベルトに装着している携帯型端末
を外した、その携帯型端末をまるで銃のようなものに変形させると、
魔力の砲弾が飛んできた方向 古さが目立つている住宅 に向
け、

「シユートー！」

携帯型端末の銃口から砲撃を、古河が田立っている住宅の窓際に放つた……が。

「あ……」

その窓際の壁をも破壊しまった……しかも半分も。

仮面の中の男性は『やつてしまつた』といわんばかりの表情を浮かべていると……。

『相変わらず、砲撃魔法が下手ね、あなたは

からかい氣味に通信してきた柔らかい声に、男性は舌打ちをし一言。

「……つねに

『住宅を傷つけたので・2ポイントよ』

「ぐ……了解

通信を閉じると、すぐさま携帯型端末を元に戻し、ベルトに装填しよつとしたとき、

「はつー」「つうおつやー」

「うああー?」

前方から現れた剣型デバイスと槍型デバイスに魔力の弾丸が甲冑に襲つた。

それらを喰らつた戦士は仰け反りながらも、後方にバックステップで下がり、すぐさまタツチパネルを現せ、剣のタツチパネルを押しした。

ベルトの右腰に差していた鍔の無い剣の柄を取り、携帯型端末を真横に挿すと、携帯型端末から片刃の刃が飛び出た。

戦士は剣を軽く振つて、それを正眼に構える。

「やっぱり、俺は剣のほうが向いてるな……ぜえりやああーー！」

戦士は全身に甲冑を身に纏つているにも関わらず、二メートル前にいる魔導師たちに高速で接近し、魔導師三人がデバイスを構える前に、剣を一閃させた。

魔導師三人は膝から崩れ落ちて氣絶した。

『模擬戦と『アーブトギアシステム』の試運転はこれにて終了。みんな、ご苦労さま』

言葉が住宅街に響くと同時に、住宅街は消え去つていき、全ての住宅街が消えると、あとに残つたのは真っ白い部屋の訓練スペースとなつた。

「うー、いてえ……」

「つつ、手加減してくださいよー」

「ぐつ、がが、じーじー……」

「お、おー。砲撃喰らつたやつ……死んでねえか?」

「いや生きているでしょ? わすがに……」

訓練スペースには戦士と戦つた、『陸おが』の魔導師たち。

見ての通りさつさまで行つたのは、先程の言葉通り、模擬戦……そしてアーブトギアシステムと云われる試運転であった。

そして、そのアーブトギアシステムを身につけた戦士は荒々しくベルトを外すと、甲冑は消え、一人の男が立つていた。

『おつかれさまー、アルスちゃん』

「そこで待つていろよ、バロウウウウウウ!-!-』

男 アルスはさつ叫ぶと、すぐさまスペースを飛び出していった。

* * * * *

アルス side

「バロオオオオオオオオウ!-!-』

「あらあ、アルスちゃん、『苦労さま』

俺はすぐさま訓練スペースを覗けるとある部屋へと駆け込みながら叫んだ。

落ち着けと自分自身に言つが、落ち着けねー!

「もう そんなに怒らないでよ、ちょっとしたお茶目じゃない
それにつもののクールが無くなっているわよ 」

「なにがお茶目だ！ 僕は朝からひどい目にあつたんだぞ！」

肩まで伸びた金髪の上にはカチューシャ、シワなどまつたくない肌の童顔。はたから見れば立派な女性だが、こいつはれつきとした男 バロウ・クルウス一尉だ。

俺と同じ教導官資格を持つており、そしてデバイスマスターと云われるほどの天才の男いや、オカマであり、俺の親友といふか悪友といふべき男で俺よりも一段上の上司。

顔はイケメン顔だが、オカマ語を使うため、あんまり寄りつかない
……つてそんなことはどうでもいい！！

「貴様、メガーヌになに送つた！？」

「なにって……あなたが今まで抱いた女の数」

「ぬあがああかあああああ！」

なに平然とこいつはメガーヌに嘘の報告をしているんだ、通りで朝からメガーヌが黒いオーラを纏つっていたわけだ！！

勇気を振り出して、デートに誘つたのに、

「あら？ わたしじやなくて、昔抱いたわたしよりもいい女とデートしてくれば？ きっと楽しいデートになるはずよ？」

と断れたんだぞ！

この野郎……俺がこの アーブトギアシステムV1 の試運転を断つたからって、こんな嫌がらせをして……！

俺の家庭を崩壊させるつもりなのか！

「まあ……その……元気だせ」

俺の肩をポンと優しく、そして申し訳なさそうに手を伏せているレジアスさ 不本意であったが、今は仕事中であるから 中将であつた……つて！

「いたのですか！？」

「戦闘が始まつてからほほ最初からな。…………すまない、バロウを止められず」

「…………いや別に構いませんけど」

中将は必死に止めてくれてたんだ、この人を責めるわけにはいかない。

……と怒りを抑えながら、ベルトを投げ渡した。

「とりあえず、アーブトギアシステム は問題なかつた。寧ろ、問題は見つからなかつた」

「ええ、」苦労をまでした。アルス二尉、引き続き休暇をお楽し

みぐだせー

……有給を取った俺を脅迫し、仕事をさせた奴が言つ台詞ではないぞ。

「バロウ一尉、ついに成功したな。　アーブトギアシステムV1
が」

「ええ。　これならこの地上にいる魔力値が低い魔導師たちに装着
できます」

「つむ、これはまだ一つしか作ってはおらんのか?」

「いえ、二十本ほど製作でできています。　そのうちの一本はアルス
一尉、もつ一本はゼスト隊長に渡そうかと……彼の魔力値は変わつ
ておりますんでしょうか?」

「つむ、魔導師ランクはS+だが、魔力値は低いままだ……恐らく。
ほか十八本は?」

「ほか十八本はまだ検討中です。　他にアルス一尉やゼスト隊長と
同じとはいきずとも、それほどの実力者がいればよろしいのですが
……」

レジアス中将とバロウの対談が始まり、俺は　アーブトギアシステ
ム　がようやく出来たことに感動する。

アーブトギアシステムV1　……一年半前にバロウが提案したア
ームドデバイス。

携帯型端末をベルトに装填する」とひよつてアーマーを開拓させるデバイス。

「これは魔力値が低い魔導師だけ（・・・）装着できる」デバイスであり、先程の試運転は魔力値がC+である俺に本当に装着できるのかだ。模擬戦に関しては俺が訓練スペースに入った直後に聞いたが。

携帯型端末には展開させるための暗号を掛けられており、違法魔導師たちに手に渡つても展開出来ないようにしてある。

暗号は後に手渡す後輩たちに決めてもらおうとしている。

そして、リンクーコア所持者でなくとも運用できる、魔力素質を必要としないといわれる アーブトギアシステムV2 も制作中だ。

V1とV2の一つを作るには訳がある……まず一つ目は同じようなアーマーばかりでは混乱する、そして一つ目魔力値がある者とない者のアーマー耐久度について、これから調べなきゃいけないからだ。

さてさて……アーブトギアシステム を装着させる予定の連中に訓練させないといけないな、アーマーを装着するとやはり身体が重い……、どのように訓練させよつか?

ふむ、まだ装着させずに、重りを付けたジャージを身に纏わせるか?

「アーブトギアシステムV2 のためのプロトタイプのようなものですけど、地上の平和を守るためにどうか使ってください。レジアス中将」

「アーブトギアシステムV1 の製作、じつは苦労だった、バロウ一

尉。引き続き アーブトギアシステムV2 も頼む。しかし、無理をせずに、有給を取り、体を休めろ」

おつと、考えていた間に、レジアス中将とバロウの対談が終わったようだ。

さて、試運転は終わったことだし、俺は帰るか……って！

「どうすればいいんだ、俺！？」

「あ、どうかしたの？」

「貴様……！」

いけシャアシャア、そんなことを言えるなこの野郎！

いや、ここは口論している場合じゃない！ とりあえず、誤解を解くためにさっそく家に帰らなければ！

俺はレジアス中将に敬礼し、部屋から出ていった。

* * * *

我が家に着き、俺はすぐさまメガーヌがいるであらう部屋に行くと、

「……ふうん、それ本当なのかしら？」

真っ黒いオーラを発し、笑顔なのが目が笑っていないという表情を浮かべ、ベットの上に座っているメガーヌに俺は震えそうになりながらもなんとか耐えながら頷いた。

「ああ、全部バロウの嘘つばちだ。」
「どうより、信じるな、あい

「ふん、どうかしり」

そう言って、メガーヌはプレイッと俺から顔を反らした。

「メガーヌ……俺をそんなに信用出来ないのか？」

111

仕方がないな……」と、

卷之十一

俺はメガリ又は一気に近づきそのままヘッドに押し倒した

ここはメガーヌの弱いところなのだ。

「...」

「それならば、信用されるまで……………じみつか？」

「つあ！ べ、別にい…… やあん！？」

「ん?
いやか?
だつたら止めようか、仕方ない」

「え？」

そう言つて、俺はメガーヌから離れて、ベットから降つる。

「仕方がないな。メガーヌが嫌がつてゐるんだから、今日まわつやめるか」

「……」

「残念だな、俺はメガーヌとやりたかったんだがな。しちゃがない、朝お前が言つていた通り、昔の女とデートしてくるか」

「つー」

ベットから立ち上がりつとしたとき、腹の周りに腕が巻き付かれた。

「…………ないで」

「ん？」

「意地悪しないで……お願いだから、行かないでえ

…………。

いかん、これは少し虚めすぎたかもしけんな。

メガーヌが涙声になつてしまつてゐる、やりすぎたな。

そつと腰にまきついているメガーヌの腕を放し、俺はゆつくつと後ろに振り向くと。

「…………ひい

上目遣いでしかも涙目で許しを請うかのよつて潤んで見つめてくるので、パリンと頭のなかで何かが碎かれたような気がする。

「ひー」

「んむつー? んんうー」

メガーヌの唇を奪うと、すぐさま彼女の口内に舌を進入させた。

俺たちは唾液を交換し合い、唇と唇を吸い付き合ひ。

「…………ひ、もう我慢できんぞ? いいな?」

「…………はあ。ええ、もう滅茶苦茶にして

ここから先は俺たち夫婦の賞みだ、もうこれにて君たちにもう見せることは何もない。

第38話（後書き）

はい、ここからは夫婦の嘗みなので邪魔しちゃ飽きませんよ。

それと アーブト、ギアシステム での戦士のイメージはカブトのマスクドフォームそしてG3-Xが融合としたイメージであり、これに関しては個人が勝手に考えたものであり、苦情に関しては一切受け入れません。

第39話（前書き）

50万PV達成！

読んでくれているみなさん、本当にありがとうございますーー！

近々、記念短編小説を書きたいと思つていますので、よろしくお願
いいたします！

リンク side

……暇だ。

リビングにあるソファーアで寝転がりながら、そう思った。

アルスさんはメガーヌさんとデート　後に聞いた話、家の中で一
ヤンニヤンしてたらしい　してゐるし、母さんと父さんもデートし
ちまつてゐるし、ゲンヤさんファミリーは果物狩りに食べ放題バイキ
ングに行つてゐるし。

今家にいるのは俺とアインハルト、セラとルーテシアの四人だ。

ルーテシアは今日デートに行つてゐるアルスさんたちに預かってほ
しいと言われたからだ。

今頃三人は俺の部屋でゲームでもしてゐるんだろう　今日はなぜ
か外に出ようと気がまつたくでないから、家にこもつとみんなで決
めた。

「暇だなあ……」

今日はまづトレーニングをする気力もなし、そのまま寝ちやおつ
かな……。

ウトウトしてきたので、瞼をそつと閉じじる。

「それだったら、遊べー！」
「遊ぶですー」

「ベビーベル」

腹部に強い衝撃が奔つた！！

しかも、ちょうどいい場所に入ったので、悶絶してもおかしくないくらい……っ。

俺は痛みに耐えながら瞼を持ち上げると、俺の腹部に座っているのは意地悪い笑みを浮かべた一人の姿があった。

「つこの……なにしゃがる、アインハルトにルーテシア」

「ふーんだ。わたしたちをむしして、ねていのおこにやんこばつだもん」

「ぱつですか、ぱつですかー。」

「ああ、そりゃ……」

反論する気力もない俺は一人をゆっくりと降ろして、俺もソファーからゆっくりと立ち上がる。

つたぐ、せりきまでのウトウト感がなくなつてしまつたじやねえか。

「それでどんな遊びするんだ？」言つとくがゲームはいやだぞ、以前お前らは俺に負けたからって泣いたからな」

今から三ヶ月ぐらい前に、俺は一人と一緒にゲームをしたんだが、この一人俺に負けたことが悔しかったから思いつきり泣いた。

そして、その原因とみなされた俺は母さんとセラにしつぽり怒られてしまつたというわけだ。

あの悲劇はもう「めんだ……。

『…………』

二人は俺の言葉に黙り、すぐさま顔を寄せ合ひ、コシココシと話し合い始めた。

……おいおい、ゲームのほかは何も考えていなかつたのかよ。

「……思いつくまで、俺は横になつてるぞ」

『ダメ――――――!』

寝転がるうと、再びソファーに座り込んだが、二人はすぐさま俺の腕をつかみ寝転がせないように引っ張り始めた。なにくそ、負けるもんか！

俺は寝転がるうと一人から腕を引き剥がそうと力をこめるが、ちびっ子パワーと言つものはずのものでなかなか外れない……。

腕を引っ張る一人と、寝転がろうとする俺との対決にいつになつたら終わるんだろうと考え始めると。

「はい、そこまで

後ろからちょっとだけ強く押された俺は一人に引っ張られたこともあり、ソファーから離れた。

振り向くと、そこにはいたずらっぽく微笑んでいるセラの姿があった。

「リンク、二人ともやつぱりリンクと一緒にゲームしたいんだって。私はほらゲーム弱いから

後半の部分、哀愁漂わせるように寂しそうに言わないでくれよ。

まあ、セラはゲーム苦手だからしょうがないけどな……。

「……はあ、二人とも

『……』

「俺に負けても泣かないって言つ約束をしてくれるなら、俺はお前らとゲームをしてやるぞ? 約束するか?」

「……するするーー! ゼーッたいなかないーー!」

「泣かないですー!」

一人は手を上げて、そう言った。

「よし、それじゃあ部屋に戻つてな。すぐに行くから」

『はーいーー』

一人はどたばたと足音を立てながら、リビングから出て行つた。

「さてと、小さな姉さんたちの相手をしに行へか」

「え？ 私も？」

「当たり前だ」

不安そうに聞いてくるセラに問答無用でぱちぱちと鳴らしだが、

「大丈夫だつて、やり方は俺が教えてやつから。くたくそなりのやり方をな」

「なつ、リンクー！」

「おお、怖い怖い」

「もー！ 絶対にリンクを倒してやるんだからー！」

セラはプリプリと怒りながら、リビングから出て行つた。

いやー、あんなにムキになるといつていうが面白いつていうか、かわいいつていうか。

マスター、セラちゃんをからかってしまつてはいけませんよ？

「うーん、からかっちやつたことこみゅうと申し訳なかつたな……」

ちよつとだけですか……

呆れたようにため息つくエクセリアスだが、俺はそれを無視して、棚からお菓子の入った籠を取り出す。

そのなかには、セラやアインハルトにルーテシアの好きなお菓子ばかりだ。

「さてさて、行きますかね」

「何秒での子たちを倒しますか？」

「いや、さすがに秒数は無理だつて……」

エクセリアスの言葉に苦笑いをしながら俺は籠を持ち、自室にいる三人の下へ歩き出した。

* * * * *

それから三時間が経ち、今はというと。

「……たく、いい寝顔で寝ちまつて

俺を除いた三人はぐつすりとお休み中だ。

しかも、三人揃つて俺のベットを占拠しているので、困ったものだ。

「やれやれ、まあ別にいいけどな」

これがレノンとかサイファーなどの男供だつたら遠慮なく蹴つていたものだが、今寝転がっているのは女の子。

しかも一人は幼い子でもう一人は幼馴染、そしてその三人は愛くるしく可愛い寝顔で眠つているのだから起こす気もない。

「さてと、俺は部屋を片付けますか」

部屋のフローリングは食べかすやお菓子の袋によつて少しだけ足の踏み場がなく汚れてしまつていて。

さすがにこれは見逃すことはできないな……。

「マスター、がんばってくださいね

「ありがとさん、がんばるよ」

エクセリアスの応援に苦笑しながら答え、俺は散らばつていてるお菓子の袋をまず一枚拾い上げた。

第40話（前書き）

今回はシリアスあり、そして甘めもあり……………かな？

半身を隠しながら少女は悲しくそして寂しげに見つめていた。

目の先にいるのは一人の若者と白いドレスの女性が仲睦ましく互いに微笑みあいながら手をつないでいた。

少女はあふれ出できそうな涙を抑えようと両手で田元を押さえたのだが、それでもあふれ出る涙を抑えることができずに頬を濡らした。少女はすぐさま自室に戻り、高級感溢れるキングサイズのベッドにて横たわり、慟哭した。

* * * * *

セラはゆっくりと田を開き、まず視界に映つたのは暗闇に包まれ滲んだ天井だった。

滲んでいる？

「なんでだろ？」

田元を手の甲で拭つと、滲んでいた原因が分かった　涙だ。

「どうして、涙なんて流れちゃったんだ？」

「どうして、涙なんて流れちゃったんだ？」

自身がなぜ涙を流していたのか覚えていない……夢見が悪かったのだろうとセラはそう決め付けるが。

「どうして……こんなに胸が痛いの？」

どうして？ なぜ？ いくら考えても考えても答えが見えなかつた。セラは頭を手でやつと添えながら、自分がどうしてこんなに胸が痛いのか涙を流してしまつたのかを考えようとしたとき、

「おーい、もう飯の時間だぞー」

パチンとスイッチ音を立てるとい瞬間に、この部屋の電気が点いた。セラは声のした方向を振り向くと、そこには一ショットに長ズボンといったラフの格好のリンクの姿が立つていた。

* * * * *

リンク side

電気をぱぱちんとつけると、そこには田覚めたセラがベットに身体を預けている姿があった。

でも田は開いているから、起きているな。

「おー、ようやく起きたか…………って大丈夫か？」

部屋に入つて早々俺はセラに思わずそう言葉を投げつけた。

横目でしか分からぬが、若干セラの顔が赤くなっている……ひとつしたんだろ。

「え？ だ、大丈夫、だよ」

セラは上半身を上げ笑顔でそう言ったが、そのセラの笑顔に陰りがあるのが分かる。

長年一緒にいるから分かるその笑顔、そして 夏馬（俺）がりんク（俺）になるまえの、笑顔にそっくりだったから。

「なにが『大丈夫』だ。涙が目じりについてるぞ」

「ええ！？ もう取ったのに！？」

「こう」とはやつぱり涙がついてたのか…… 簡単に引っかかってくれてありがとうと言つていいのか？

ああ、それはどうでもいいか それよりもセラだ。

俺はセラに近づき、ワシャワシャと乱暴に頭を撫でて、さらに頭を小さく回す 軽い力をこめて。

「あ、う、いや、ややあ、や、やめてえ～～

「うむせえ」

悲鳴混じりにセラに俺は軽く無視し、せりこんで回して回して、ポイとベットに放り投げ。

「うう～、気持ち悪い～」

「つたぐ、お前は」

こいつは何もか溜め込んでしまつタイプだ 冬馬（俺）もそだつた、家族には嫌なことを言わず溜め込んで、ついには暴走した……その結果、家族に酷い傷跡を残してしまったんだ。そして、溜め込みすぎると……心が壊れちまう。 文字通りの意味で。

「あんまりや、一人で考えすぎんな。 お前には俺やアインハルトにおまけのレノンがいるんだからわ」

セラにとつて最高の相談相手であり心の抛りビンビンであるリューグさんやノエルさんはもういない。

二人が眠っている墓の前で泣いているセラの姿を見て、俺は決めた
んだ セラの心の抛りビンビンになつてやるつて。

「リンク……」

「だからさ、話せ 多分いやな夢でも見たんだろう？ 言つてみる、
解決してやつから」

「……分からぬの」

セラはポツポツとしゃべりだす。

「覚えていないけど、なんだかとても胸が痛かつたの、悲しかつた
の」

「どうしてかは分からんだけ……ただこれだけは言へるの」

「大事なものを取られた　　目を覚ましたらそんな気持ちになつてたの」

なんて言えばいいんだろ？

まず思ったのはそれだった。

冬馬のときは言つ立場だつた、でもときたまに受けける立場になる。でもこれはさすがに、なんて言えばいいのか分からない　　このいつ相談は冬馬のときにはなかつた、なにせ受けける立場は片手で数えるくらいしかなかつたから　　だから。

俺はそつとセラを抱きしめた。

「コンク……？」

「……なんていえばいいのか分かんないからさ、これで勘弁してくれ

さすがに恥ずかしいと思つたけど、これしか思いつかなかつた。

こんなんでセラの抱えている気持ちをなくすことができるかなんてわからない……でも今の俺には「これしかできない。

「…………ううう、これで十分だよ」

「やう」

「あつがとい……」

そつまひへ、せうまほじかひに俺の胸に擦りつへ……。

そんなやうの頭を俺はそつと簾でよいつとしたとき。

「コンクー、セリヤセリヤー、じむ……」

部屋に響く母さんの声。

俺たちがそつと後ろを見ると、やうこま遲い俺たちを呼びに来ただろい母さんの姿があった。

『…………』

「な、な、な、な、な」

母さんはプルプルと震え、そして

思いつきり俺たちに怒鳴った
といつよりも叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9329o/>

霸王の義兄は転生者

2011年10月6日15時28分発行